

# 第8回 日韓3女子大学交流合同シンポジウム

## 参加報告書

実施期間:2017年12月12日～14日

実施場所:大韓民国梨花女子大学校キャンパス

トップページ &gt; 理学部 &gt; 2017年 &gt; 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

## メニュー

平成30年度理学部第3年次編入学説明会を4月15日に開催します

平成28年度理数学学生応援プロジェクト後継事業の顕彰式を開催

湯浅年子記念奨学基金の平成29年度特別研究員候補者を募集します

文部科学省主催第7回「サイエンス・インカレ」開催についてのご案内

学部オープンキャンパス2017開催のご案内 理学部：7月15日(土)

平成29年度「第5回湯浅年子賞」募集のご案内(平成29年8月10日締切)

平成29年度「第3回黒田チカ賞」募集のご案内(平成29年8月10日締切)

理学部主催 第5回宇宙講演会 ～子どもから大人まで宇宙に夢中！～

第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加



## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加

2017年12月18日更新

2017年12月12日から14日まで、韓国の梨花女子大学校において、梨花女子大学校と日本女子大学および本学の3大学の理系学生の交流を目的とした第8回「日韓3女子大学交流合同シンポジウム」が開催されました。本学からは、文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」事業の支援を受けて、20名の大学院生および学部生、4名の教員が参加しました。シンポジウムでは、各大学から参加した学生が研究内容や研究成果について、英語で口頭とポスターで発表するとともに、各大学の教員代表から4件の特別講演がありました。本学からの随行教員として、過去にも数回参加している工藤和恵教授に今回のシンポジウムの様子について報告してもらいました。



### 工藤和恵教授の報告

工藤 和恵

 お茶の水女子大学 基幹研究院 自然科学系  
 准教授 (理学部情報科学科)

理系学生の英語による研究発表能力の鍛錬、海外での研究会参加の訓練、および日韓女子大学の友好関係構築を目的として、7年前から日本女子大学、梨花女子大学校、および本学の理系学生(学部生および大学院生)が、合同で研究発表会をおこなっている。実は2000年からの数年間も同じ3女子大学で合同シンポジウムが開催されていた。私自身も大学院生のときに参加した経験がある。その後数年間の中断があり、2010年から新たな形で再開された。再開されてから8回目の本年度は、12月12日～14日の3日間、本学からは学部生および大学院生20名、教員4名の総計24名で韓国梨花女子大学校を訪れた。今年は日本女子大からの参加者も同程度の人数の参加があり、大人数での訪問となった。それにもかかわらず、全体として大きな問題もなくシンポジウムを開催することができた。梨花女子大の準備と運営に対するご努力に、感謝している。

初日は教員による基調講演と、その後に学生交流会、2日目は数学・統計学、物理学・応用科学、化学・ナノサイエンス、生命科学・薬学の4つのセッションにわかれた口頭発表、3日目は参加者全員によるポスターセッションがおこなわれた。第2日目の発表では、分野によって各大学の参加者の割合が大きく異なっていたが、全体としては3大学の発表数はほぼ同数であった。梨花女子大では試験などの日程に重なっており、できるだけ都合をつけて参加していたようだった。そのため聴衆が少ない分野が出てしまったのが、少し残念だった。第3日目のポスター発表では、日韓の学生および教員が各自のポスターの前で、討論している様子があちらこちらで見受けられた。ポスターボードは廊下に設置されており、例年になく寒い寒さのため、立っただけでも凍えそうな状態のなか、熱い議論が交わされたものと思う。

本シンポジウムは、学生間の交流と各自の研究を英語で他分野の研究者に紹介することを目標としてきた。本学の学生たちは、9月または10月から発表練習を行っており、口頭発表での質疑応答ができるようになっていた。前回のシンポジウムからベスト発表賞が導入され、今年度は各大学から4名ずつが表彰された。お茶大からは、岡田翔子、米村美紀、叶野花菜子、山内万里花の4名が受賞した。今後の励みになれば幸いである。学生たちにとっては、梨花女子大生との交流、およびソウルでの見聞から得たものは大きかったと思う。この経験が、学生たちの今後の研究生活に活かされ、将来を考える良い材料になることを願っている。



ツイート



B! ブックマーク 0



G+



いいね! 0



ページトップへ戻る

[▶ 電力使用状況](#)
[▶ 教職員メニュー](#)
[▶ このサイトについて](#)
[▶ ソーシャルメディアポリシー](#)
[▶ 個人情報について](#)
[▶ プライバシーポリシー](#)
[▶ アクセスマップ](#)
[▶ サイトマップ](#)
[▶ お問い合わせ](#)
[▶ 情報セキュリティポリシー](#)

国立大学法人お茶の水女子大学  
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1  
責任者:  
E-mail:



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

[PC表示](#)
[スマホ表示](#)

Copyright © OCHANOMIZU UNIVERSITY. All rights reserved.

## 参加学生

派遣学生	所属	学年	指導教員
山内万里花	ライフサイエンス専攻（生命科学）	M2	加藤
石田萌子	ライフサイエンス専攻（生命科学）	M2	加藤
重富一恵	ライフサイエンス専攻（生命科学）	M2	近藤
大石悠起子	理学部（生物）	B4	近藤
黒澤静霞	理学専攻（化学・生物化学）	M2	相川
小俣莉子	理学専攻（化学・生物化学）	M1	山田
村瀬真央	理学専攻（化学・生物化学）	M1	矢島
叶野花菜子	理学専攻（化学・生物化学）	M1	矢島
佐野萌佳	理学専攻（化学・生物化学）	M1	矢島
寺島千絵子	理学専攻（化学・生物化学）	M1	森（寛）
八日市屋朋子	理学部（物理）	B4	鷹野
米村美紀	理学専攻（物理科学）	M2	曹
速水香奈	理学専攻（物理科学）	M1	曹
岡田翔子	理学専攻（情報科学）	M2	工藤
山田優輝	理学部（情報科学）	B4	小口
佐々木美緒	生活工学共同専攻	M1	太田
浅野春菜	生活工学共同専攻	M1	太田
保坂玲	生活工学共同専攻	M1	太田
齋木美果	生活科学部（食物）	B4	赤松

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 山内 万里花

所属(Affiliation): ライフサイエンス専攻 生命科学コース

(指導教員(supervisor): 加藤 美砂子)

発表(Presentation): Characterization of *Chlamydomonas* Autophagy Mutant

私が本シンポジウムへの参加を希望した理由は2つあります。まず1つ目は、修士1年の夏に参加した国際会議でのポスター発表が上手くできず、一緒に学会に参加していた先生に頼りきりになってしまったことが心残りです。英語の研究発表にもう一度チャレンジしたいと思ったからです。2つ目は、大学院修了後にはグローバルな環境に身を置きたいと考えていながらも、喋り慣れない英語を使うことへ抵抗感があり、そんな自分の殻を破りたいと思ったからです。



シンポジウムの準備は授業を通して10月から始まりました。普段、研究分野の論文を読むことでしか英語に触れていなかった私は、初回の授業で突然英語での自己紹介を求められ、気恥ずかしさからつい日本語を喋ってしまいました。この時「人一倍頑張らねば」と痛感し、12月の梨花女子大学での発表を成功させるべく、プレゼンテーションの準備に注力しました。

プレゼンテーションの準備で苦労した点は、理解しやすい言葉や言い回しを使うことです。受験英語のような、論理的に意味が通じていれば良いようなものとは違って、プレゼンテーションでは聞いている相手が容易に理解でき、印象に残るような喋りをする必要があるからです。本シンポジウムの要旨を指導教員の加藤先生に添削をお願いしたときにいただいた、「あなたの英語は翻訳機のような」という一言にはっとして、このままではいけないと、授業での他の人の発表や、市販の本も参考にしながら原稿の準備をしました。

授業の一環で、口頭発表のリハーサルの機会もありました。この時、原稿が書き上がっていても思うように喋ることができませんでした。これをきっかけに、きちんとした英語の喋りをするため、単語のアクセントをひとつひとつ調べて確認したり、ぎこちないプレゼンテーションにならないように喋りの練習を重ねたりしました。

何かとばたばたしているうちに韓国への出発当日になり、行きの飛行機の中では不安でいっぱい、何度も発表原稿を確認していました。しかし現地に到着すると、学生同士のレクリエーションがあったり、梨花女子大学内のレストランでの食事会があったりと、不安が吹き飛んでしまうくらいに楽しい時間を過ごせました。

2日目には口頭発表がありました。いよいよ、準備に力を入れてきたプレゼンテーションを行うということもあって緊張しましたが、1日目での学生同士の交流があったことから会場には知っている顔も多く、想像していたよりもずっとリラックスして発表を行うことができました。質疑応答は準備ができないため、きちんと対応できるか心配でしたが、たどたどしいながらも何とか質問に答えることができました。口頭発表の場では、座長も務めました。座長の依頼を受けた当初は役目を果たす自信がありませんでしたが、学生同士の発表の場でないとなかなか経験できない貴重な機会だろうと考え、引き受けました。担当したセッションでは質問が活発に出ていましたが、上手にタイムマネジメントができたと思います。また、自ら発表者に質問を投げかけることにも挑戦し、より活発なセッションにすることができたと思っています。

3日目にはポスター発表がありました。ポスター発表に向けての原稿の準備は特別していませんでしたが、口頭発表に向けての発表練習の成果から、自分ひとりの力で発表をし、

質問への対応をすることができました。修士1年の時にはこれが全くできなかったため、成長を実感し、嬉しかったです。自分の発表だけでなく、2日目の口頭発表で気になった発表者のところへ行って質問するなど、積極的に参加することができました。始まる前は長いと思っていた2時間のポスター発表の時間はあっという間に過ぎてしまい、もっと他の人のポスターのところにも行きたかったと思うほどでした。

本シンポジウムへの参加が決定し韓国での発表本番までの2か月半は、慌ただしくも非常に濃密で、私自身大いに成長できたと感じています。自分自身の言葉で研究成果を英語で伝えることや、英語を喋ることへの抵抗感が薄れたことから、シンポジウムへの参加意義を達成できたと思っています。光栄なことにベストプレゼンテーション賞をいただき、今後の研究や英語学習の励みになりました。慢心することなく、英語を使うことやプレゼンテーションに磨きをかけていきたいと思っています。

私は研究を開始してから3年弱、研究室にこもって実験し結果を出すことだけではなく、その成果を学会などの場で発信することに研究のやりがいを感じていました。大学外での研究発表の場としては本シンポジウムが最後でしたが、研究生活や学生生活の集大成にふさわしい機会であったと満足しています。

最後に、指導していただいたお茶の水女子大学の先生方や、シンポジウム開催にあたって尽力いただいた3女子大学の先生方、暖かく迎え入れてくださった梨花女子大学の皆様に感謝申し上げます。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 石田 萌子

所属(Affiliation): ライフサイエンス専攻 生命科学コース(指導教員(supervisor): 加藤 美砂子教授)

発表(Presentation): The conversion of glycerin to DHA by microalgae, *Cryptocodinium cohnii*

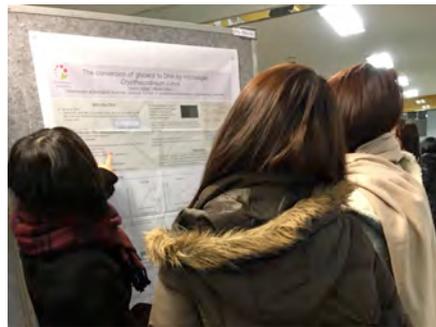
今回、梨花女子大学における日韓3女子大学交流合同シンポジウムにおいて、自分は初めて英語での口頭発表、ポスター発表の機会を得た。参加動機やその達成度、感じたことを報告したい。

参加動機は、同じ理系の進路を選び、研究活動をしている学生たちがどのようなモチベーションや背景から、今の研究をしているのか知りたいと思ったからである。特に就職活動を通じて、自分の興味は一貫していて、軸があることに気づいた。その興味を追求してきた結果現在の研究にたどり着いたと思っている。そこで、他の人が何をきっかけに専攻分野を選び、現在の研究をしているのか、とても興味を持つようになった。今回、韓国の理系専攻の学生との研究交流の機会が持てるということで、このような好機はないと考え、参加を決めた。

積極的に話し掛けなかった自分の努力不足だが、梨花女子大学側の参加者が少なかったこともあり、交流の時間が短かったのが残念だった。それぞれが現在の研究をするに至ったモチベーションまでは話す機会を持てなかったのが心残りである。一方で、日常的な会話や研究に関するディスカッションを通じて、他大学、ましてや他国の学生の研究の様子を知ることができ充実したものとなった。梨花女子大学の学生はアグレッシブではっきり発言するのでは、という出発前の予想に反して、大人しく、あまり自己主張せず穏やかに議論してくれる学生が多いと感じ、親近感も覚えた。

口頭発表においては、生物学だけでなく他分野の方も参加されるということだったので、分野外の方にも自分の研究内容を理解してもらえよう、噛み砕いて説明することを常に意識した。実験結果を話す時間は少なくなってしまうが、背景を長めに話すことで、自分が行っている研究の概要を分かりやすく伝えようと考えていた。当日は、慣れない英語での説明に集中してしまい、聴衆の反応を見ながら発表できなかつたことが反省点である。その結果、自分の分野では基本的だと思っていたことに関して梨花女子大学の学生から質問を受けた。質疑応答では十分に理解してもらえだけの説明ができなかつた。質疑応答の際に説明しきれなかつたことは、相手の質問の意図を汲み取れなかつたこと、英語力の不足が原因だと思う。しかし、翌日のポスター発表においてもその学生さんが再度聞きに来てくれたので、その件に関して説明することができ、また他の点についてもディスカッションすることができたのでとても有意義であった。自分の発表内容に興味を持ってくれ、理解するまで質問してくれたことに感謝したい。自分に関しては、特に英語力を高める必要性を感じた。また、英語力を上達させることだけでなく、自分の専門分野におけるキーワードは、いくつか語彙を持っておく必要があると思った。相手がわからなかつた場合でも、違う言葉を使ったり、より噛み砕いた表現ができるよう準備しておくことも有効だと思う。

ポスター発表では、扱う生物や物質は違うものの、同じような目的で、同じようなアプローチで研究を進めている梨花女子大学の学生さんとディスカッションしたことがとても良い経験になった。お互いに、自分の研究の理想の着地点なども話すことができ、研究モチベーションを高めることができた。また、日本側の学生とも、英語の発表で理解が難しかった点について、お互いに理解を深める時間となった。2日目の口頭発表では全く聞けなかった、物理分野の研究についても触れたことは、自分にとって新鮮であり、他分野であっても理解しようとする姿勢の大切さを感じた。



今回、梨花女子大学の学生の英語力の高さに刺激を受け、今後他国の人々とも自由にディスカッションや会話できるような力を身に付けたいと思った。また、慣れない英語で発表する機会を持ったことで、考えを整理し、自分の研究をどう噛み砕いて相手に分かりやすく伝えるかを考えるととても有意義な経験になった。

このようなシンポジウムを企画し、運営して下さった方々や相川先生、発表に関してご指導下さった指導教官の加藤先生や授業担当のサビン先生、引率して下さった先生方、また歓迎して下さいました梨花女子大学の先生や学生さんに心から感謝したい。さらに、今後もこのシンポジウムが続き、後輩達が、自分の研究を客観的に振り返ったり、他国の学生との交流から刺激を受け、多くを学ぶ機会を得て欲しいと思う。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 重富 一恵

所属(Affiliation): ライフサイエンス専攻生命科学コース(指導教員(supervisor): 近藤 るみ)

発表 表(Presentation): Effect of toxic tolerance locus on host specialization in *Drosophila sechellia*

今回、初めて英語でのプレゼンテーションをする機会を得た。今回プレゼンテーションの発表だけではなく、ポスター発表ができるのも良い機会だと思った。英語での発表だけではなく、韓国の人と会話をしたい、少しでも韓国の文化を学びたい、という動機で今回申し込んだ。私は英語力にあまり自信がなかったが、せっかく行くのだから、なるべく梨花女子大学の学生や韓国の人と交流したいと考え、今回は勇気を出して話しかけることを意識した。確かに会話に詰まることもあったが、相手も優しく対応をしてくれて、仲良くなることができ、話しかけてよかったと思った。とにかく尻込みせずに話すことの大事さも感じたが、一方で勢いだけではいけない面も多くあった。英語の語彙力や、生物学の基礎、応用についてしっかり理解していることの必要性も感じた。



シンポジウムが開催された梨花女子大学は非常に大きな大学で大変驚いた。キャンパスの端から端まで歩くのも一苦勞なほど広く、校舎も西洋を思わせる歴史的な建物から非常に近代的でおしゃれな建物もあり、カフェや食堂、売店なども充実していた。食堂は専用の機械で日本語の案内で注文でき、カードで支払いもできたので、韓国語がわからず、初めてでも問題なく利用でき、素晴らしいと思った。梨花女子大学は普段から英語での授業があるそうで、グローバルな教育を感じた。

一日目は現地では梨花女子大学の学生がゲームを用意してくれていた。ある英単語に対して一人がそれを体で表現し、チームのメンバーが当てるというジェスチャーゲームだった。チームメイトや司会の人と英語で会話ができたのが楽しかった。梨花女子大学の学生が積極的に話しかけてくれたおかげで楽しい時間を過ごすことができた。また、夕食では、梨花女子大での生活のこと、お互いの研究内容、オスメの化粧品など、様々な会話ができたことも良い経験となった。ふと思いつかない単語もあったが、言い換えたり教えてもらったりしてコミュニケーションを取れたのはいい経験だった。各大学の先生によるプレゼンテーションは専門分野外で理解が追いつかないこともあったがどの先生もわかりやすく説明してください、新たな知識を得ることができた。

二日目の口頭発表会は事前の授業で準備をしたものの、プレゼンテーションの発表は緊張してしまった。このような発表は練習や慣れが重要だと改めて感じた。梨花女子大学の学生は自分の研究を流暢に英語で話しており、普段から英語を話しているのだろうと感じた。また研究内容も充実しており、データ量の多さに驚いた。はっきりと結果の出ている研究も多くあり、私も頑張ろうと思った。私はとても緊張してしまっていたが、梨花女子大学の学生はプレゼン発表自体を楽しんでいる様子も感じられた。今回、違う分野の人に説明するつもりでプレゼンを用意したが、実際は4分野に分かれていたため、もう少し専門的な説明でもよかったかもしれないと反省をした。一緒に行った日本人の学生もみんなしっかりと準備しており、刺激になった。

三日目のポスター発表は1対1の会話だったため、じっくりと研究内容について説明することができ、とてもいい経験となった。この時、専門用語を使って説明をしてしまいがちだったが、相手がわからなかった場合、それを説明するための英語をきちんと考えておけばよかったという反省があった。またポスターの説明の流れについてはざっくりとしか考えていなかったため、少し説明に時間をかけすぎてしまったようにも感じた。しかし方法や今後の実験について意見もいただくことができ、とても刺激になった。またこの日は異なる分野の人の説明も聞くことができ、改めて勉強になることが多かった。物理や数学の内容は普段なじみがなかったが、しっかりと基礎から説明をしてもらい、研究内容について納得することができた。

三日目の自由行動では、梨花女子大学の近くでショッピングを楽しんだり、弘大で参鶏湯をいただいたりした。韓国での食事は全般的に食べやすく、私の口に合っていると感じた。キムチが食べ放題なのには驚いた。店員さんはどこにいても気さくで、英語がしゃべれなくても図を書いてお得な情報を伝えようとしてくれた。私は英語が分かればなんとかなるだろうという感覚で今回あまり韓国語を勉強しなかったが、簡単な意思疎通ができるくらいの勉強はしておくべきだったと感じた。とはいえ、英語だけではなく、日本語も流暢に話せる人もおり、やはり日本と韓国は近いのだなと感じた。

今回のシンポジウムは、総じて私にとって参加してよかったと思える内容であった。英語を用いて韓国の学生と研究内容に関して意見交換ができる貴重な機会を提供してくださった関係者の皆様に心より感謝を申し上げたい。シンポジウムを通して、英語力、プレゼンテーション能力ともにまだまだ未熟であることが分かったため、今後も学び続け、研究を多くの人に理解してもらえよう、発信力を身につけるとともに、研究生活もより一層充実させていきたいと思う。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 大石悠起子

所属(Affiliation): 理学部生物学科 (指導教員(supervisor): 近藤るみ)

発表表(Presentation): Towards identification of chemical substances in host plant that determine mother's choice of egg-laying site in fruit fly

12月12日～14日の3日間に渡って行われた日韓シンポジウムに参加するため、韓国ソウルの梨花女子大学を訪れました。自分の研究を口頭発表する経験を積みたいと思ったからで、こうしたシンポジウムに参加したのは初めてです。私は学部4年生で、研究を始めて間もないこともあり、学会で発表した経験はありません。来年4月からの就職を決めている私にとって、英語で発表することは残り少ない学生生活で実現したいことでした。英語で日本人以外を相手にプレゼンテーションする経験は今後の社会人生活でも役に立つと思いました。また、日本女子大学を含む3女子大学の国際交流を通じて、自身の英語運用能力も向上させたいと感じ、参加を決めました。このシンポジウムでは、初日に3女子大学の学生交流会、2日目は口頭発表会、3日目はポスターセッションが行われました。また、各大学の教員によるプレゼンテーションも3日間を通じて行われました。以下に今回の活動について報告します。



シンポジウム前に受講した授業では、徐々に発表時間を長くしながら発表練習を行いました。初めての研究発表ということもあり、どうしたら伝わるスライドになるのか、専門外の人でも理解しやすいストーリーを意識しました。自分の発表した映像を見返したり、フィードバックを頂いたりする中で、発音のくせや、早口になってしまうくせも見つかりました。しかし、その度に直す努力を続けた結果、少しずつ改善していきました。また、話し方や抑揚の付け方、アイコンタクトの仕方など、自分では意識できないことも学ぶことができました。

初日の学生交流会では、梨花女子大生が用意してくれたミニゲームで交流を深めました。ミニゲームは参加学生が7チームに分かれ、チーム対抗のジェスチャーゲームが行われました。チーム内で1人がお題をジェスチャーで表現し、その他のメンバーがお題を当てるゲームです。私はジェスチャーをやる役になり、これがきっかけで他大学の学生に私を覚えてもらうことができ、交流につながりました。積極的な行動が交流を広げることにつながると実感しました。ただ、梨花女子大生の参加が少なく、私のチームには一人もいなかったのが非常に残念に思いました。しかし、その後の夕食会では、積極的に梨花女子大生との会話を楽しみました。特に印象的だった話は、韓国の英語教育は、日本と同様にリスニング、リーディング重視であること、スピーキングは自主的な勉強で習得しているという話です。私とは歴然の英語力の差が個人の努力によって生じていることを、改めて思い知らされました。

2日目の口頭発表会では、専攻科目ごとに4つのセッションに分かれて、プレゼンテーションが行われました。私は、**Life and Pharmaceutical Sciences** のセッションに参加しました。研究対象や研究視点が学生によってそれぞれ異なっており、興味深かったです。同世代の学生が自分より高いレベルのプレゼンテーションをしていることは、非常に刺激になりました。しかし、自分の専門外の研究を英語で理解するのは難しく、専門用語を学ぶだけではなく、自身のリスニング能力もより向上させる必要があると痛感しました。また、梨花女子大生の発表は、皆さん英語での発表に慣れている様子で、堂々と発表し、質疑応答の場面でもスムーズに受け答えをしていることに圧倒されました。自分の発表は、とても緊張しましたが、こ

れまで練習してきたことを生かして発表を終えられました。リハーサル時には上手く受け答えができなかった質疑応答も、本番では自分の言葉で答えることができ、自信につながりました。ただ、議論になかなか参加できなかったという課題も残りました。疑問が生じても、単に聞き取れなかっただけかもしれないと躊躇してしまいました。月並みですが、英語力のさらなる向上が課題です。

3日目のポスター発表は、屋外はマイナス10℃という寒さの中、大学の廊下で行われました。私はショウジョウバエを使った産卵行動を見る研究という珍しさもあってか、多くの方が私のポスターに足を運んでくれたのが非常に嬉しかったです。私の専攻ではない方も議論することができ、自分が見落としていた視点からの助言は非常に勉強になりました。また、教員の中でも、特に日本女子大学の和賀教授が興味を示してくださり、結果に対する議論を熱くかわすことができました。ただ、日本女子大学やお茶の水女子大学の学生との交流が多く、どうしても日本語での発表になってしまいました。英語を使うことも目的としていたので少し残念でした。発表者と聞き手が明確に分かれておらず、自由な状況で発表が進んでいたため、大学ごとに両者が明確に分かれていたら、より英語を使う機会が増えたのではないかと思います。

3日間の韓国滞在では、韓国の文化にも触れることができました。滞在中は、本場の韓国料理を堪能し、明洞や弘大を訪れるなど、韓国の文化を肌で感じることができました。

今回、このシンポジウムに参加したことで、英語力やプレゼンテーション能力が向上したと実感したと同時に、今の自分に足りないものは何かもはっきりと実感できました。残り少ない学生生活をどう過ごすかを考える良いきっかけになったと思います。また、自ら積極的に行動する力も身についたように思います。3女子大生と積極的に交流できたことも良い経験になりました。学生最後にこのような貴重な経験をしたことは、今後の人生においても役にたつと思います。

最後に、今回シンポジウムに参加するにあたりご指導して下さった教授や職員の皆様、また現地でお世話になりました梨花女子大学の先生、学生の皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

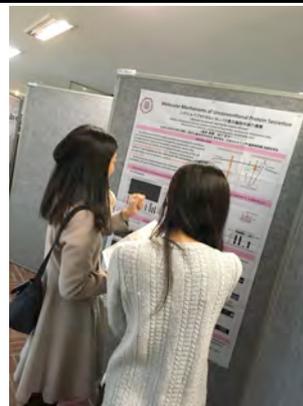
## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 黒澤 静霞

所属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 相川京子)

発表(Presentation): Cell surface translocation of Annexin A1 via the unconventional protein secretion pathway

私は、2017年12月12-14日に開催された第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加し、初めて英語で口頭発表とポスター発表を行った。私は普段、英語を話す機会がなく英語が苦手だと感じていたため、思いきってこのシンポジウムに参加し実際に会話する経験を通して、苦手を払拭したいと考えた。また、他分野の人の研究に興味があり純粋に様々な研究を聞きたいという思いで参加を決めた。結果的に、梨花女子大の学生は英語を流暢に使っており私の英語会話力は低いと実感した。しかし、そこで留まってはいけないと思い積極的に話しかけ、単語とジェスチャーでなんとか伝えようとするを察してくれたので、苦手意識は薄まった。研究発表についても専門外の人と意見交換ができとても有意義で大切な経験となった。



行く前は質疑応答やポスター発表できちんと受け答えができるか不安があった。しかし、プレゼンテーションの授業で発音や話し方を練習するだけでなく、他の人の発表を聞いて聞きやすい声量や目線、表情など良いところを学ぶことができ、不安は軽減した。リハーサルでは、直前までスライドの直しや台詞を考えていたため練習時間が少なく、原稿を読み上げてしまったため本番は相手に向かって話そうと決心した。さらに、座長を引き受けたがやったことがなく、どのように進行すれば良いのか迷いがあった。そこで、他の座長の台詞や態度を観察して、進行方法や質問の誘導など、良いなと思ったことはメモを取り色々吸収できた。これは当日にも行い、韓国の学生の素晴らしい進行がとても参考になった。

シンポジウム初日は、梨花女子大学で教授の講演と学生どうしの交流会が行われた。交流会は梨花女子大の学生が考えてくれたジェスチャーゲームで盛り上がった。ただ、グループ分けで私のいた班は日本人だけになってしまい、梨花女子大の学生と話す機会がなかったことが少し残念に思えた。夜は大学内にある中華料理店で食事した。梨花女子大の学生とも話したかったので近くに座ったが、なかなか考えていることが英語として変換されずもどかしい思いをした。しかし、座席の近い3女子大の数人で会話している中に混ぜてもらう形で、専門分野のことからプライベートなことまで話し楽しく過ごすことができた。その時に韓国の学生どうしでの会話を英語でしており、日常で使いこなしている姿にとっても憧れた。夜ホテルに到着してからもらった要旨集を読み、座長として司会をする発表者の内容を軽く予習した。どのような研究をしているかをおおまかに知ることはできたが、発表を聞きつつ質問が考えられるかという不安は残っていた。

2日目は教授の講演を挟みつつ朝から夕方まで口頭発表だった。分野によって4つに分けられており、私はLife and Pharmaceutical sciencesのセッションに参加した。

自分の発表は、1日目の歓談のおかげで知り合いが増え、緊張することなく落ち着いてできた。リハーサルよりも発音に気をつけて詰まらずに話すことができたが、ポインターがなかったために画面を見ながらマウスを動かして指していたので、目線が下がってしまった点が反省点だと思っている。

他の人の発表を聞いていて、藻類や細菌などの触れたことのない研究内容は専門用語がわからないこともあったが、データの見方は普段読んでいる文献と似ており、色々な文献を読むことは思わぬところで役立つと感じ嬉しくなった。そして、やはり原稿を読み上げている

人よりも何も見ずに自分の言葉で発表している人の内容の方が理解しやすく、私もこうありたいと強く意識するようになった。

質疑応答では、韓国の学生は先生方と時間いっぱいディスカッションしており、この日も会話力に圧倒された。自分の考えを物怖じすることなく主張している姿に刺激を受けた。リスニングが必須なことはもちろん、短い文章で簡潔に答えられると理解しやすいと気づかされ、答えに困っても口ごもるのではなく何か発言している方が見ている側からも良い印象をもたられるのだとわかった。これは日本語での発表でも当てはまると思われ、今後発表する機会があるときに実践していきたい。

私が口頭発表で一番成長できたことは、座長を引き受けたことで自分から英語で話しかける勇気が持てたことである。興味があった分子モデリングによる創薬系の内容について質問し、答えてもらえたことが大きな一歩となった気がする。つたない英語だったが、上手か下手かを気にせず何か言ってみたことが良かったのだと思っている。また、活発な意見が出るような場を作るという点で座長として上手にできたとは思えず後悔が残っているが、始める直前に突然発表者が1人増えるという予期せぬ事態に対応できたことは臨機応変さが身に付いているのだと自信になった。終わった後に韓国の先生に「Thank you」と言っていたきども安心したのを感じている。

3日目は午前中2時間のポスター発表を行った。私が3日間のうち最も楽しかったのがこのポスターの時間であった。なぜなら自由に聞いて回ることができたので、口頭発表で聞けなかった質問について十分に説明してもらい、面白い研究を色々知ることができたからである。実験手法や装置について相談することもできとても価値のある時間が持てた。

さらに、一番の思い出となったことが、場所の近かった梨花女子大の学生とお互いに説明し合ったり、韓国の先生に対して説明したりして英語でディスカッションしたことである。参加の目的としていた、英語での会話を最も必要とした時間だった。話そうと気持ちだけが先行してしまい言葉が出てこず、どうしても相手に助けをもらいながらだったが今までで一番コミュニケーションをとったと思う。学生と趣味のバレエの話になったとき、英語に対する抵抗感も忘れ、もっと話したいという気持ちに変化した。彼女の妹がバレエをやっているらしく日本と韓国でバレエの捉え方が違うのだと初めて知った。韓国では長く続ける人はプロになる人だけで、私が趣味で続けていることがとても驚いたようで3回程聞き返された。口頭発表のスライドに写真を載せておいて覚えてもらえたので正解だったなと思った。

ポスター発表が終わってしまうと3日間あつという間だったが、落ち込むこともなく楽しく学ぶことができ、色々な人と関わることができる素晴らしい機会に恵まれて幸運だったと感謝の気持ちでいっぱいになった。

街中についても少し記すと、地下鉄の車内でキャリーバッグなど大荷物を抱えていた私たちに、ご夫婦が席を譲ってくださり、とても温かい気持ちになった。コスメショップや料理屋の店員は日本語がわかるようで、日本語で声をかけられて荷物も運んでくれて少し強引さも感じたがおおむね親切だった。最高気温がマイナスという環境を初体験したが、帰国して東京の気温が寒く感じないくらい極寒だった。

私は今回このシンポジウムに参加し、英語を使ったり韓国の街を見て歩いたり今までにない経験を積むことができ成長に繋がったと感じる。英語が上達したわけではないが、使う場面に飛び込んでいける自信はついたと思う。きれいな英語でなくても伝えようとする姿勢が重要なのだと学んだ。研究において英語でのコミュニケーションが必須となっていることを実際に目の当たりにし、苦手だからと避けてはいけないなと覚悟ができた。

最後に、丁寧にご指導して下さった先生方に感謝申し上げたい。これからもこの経験を活かして研究生活を充実したものにしていきたい。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 小俣 莉子

所属(Affiliation): 理学専攻化学・生物化学コース (指導教員(supervisor): 山田眞二)

発表(Presentation): Synthesis of New Molecular Seesaw Balances and the Evaluation of the Cation- $\pi$  Interaction

本シンポジウムに参加した目的は、自分の研究内容を英語で伝える能力を身につけるためであった。これまで英語で研究発表をした経験はなく、本シンポジウムがその初めての機会となった。英語でディスカッションができるようになれば、学会等で意見交換できる人の幅が大きく広がり、これからの研究活動に向け、多角的な知見を吸収できるようになると考えた。普段の研究室生活では、日常的に英語を使う習慣はなく、英語は「読む」ばかりで「話す」力を磨く環境におらず、「話す」ことを強いられる場面も少ないことから、スピーキング力に危機感すら抱いていなかった。自分の英語プレゼンテーション能力を最大限に伸ばす心持ちで、本シンポジウムへの準備、発表に臨んだ。



シンポジウム本番までに、毎週、プレゼンテーション法研究の講義を通して英語による口頭発表の準備を進めた。英語特有の抑揚に富んだ話し方がなかなかできず、苦戦した。また、化学的専門用語の慣れない発音方法や、日本での慣れ親しんだ化合物名とは違う位置にアクセントがある呼び方を難しく感じた。普段の日本語での研究発表ではすらすらと言葉が口から出てくるのに対し、英語での発表では言葉に詰まる場面が多くあった。伝えたいことは明確であるのに、英語にならない。伝えたいことを頭の中で英語に変換し、文を理解してもらいやすいように組み替え、正しい発音、アクセントで音にすることは、瞬時にできることではなかった。しかし、発表時間を徐々に伸ばしながら練習を重ねることで日本語を英語にするまでにかかる時間を短縮することができた。また、この講義には多種多様なバックグラウンドを持つ学生が出席していた。私の専門である有機化学の知識を持つ学生は全体の2割程度で、ほとんどの学生に専門用語が伝わらない状況での練習だった。専門知識のない聴衆に対し、目に見えない「化学」の研究を効果的にイメージさせることが一番の難関であり、グホ先生のご指摘を聞いて初めて、「伝わったと思い込んでいること」と「実際に伝わったこと」にギャップがあることを知ることができた。できるだけイメージを掴みやすい表現を使うよう心がけ、鍵となるポイントは繰り返し強調することで、練習の中で「伝わる」プレゼンテーションを習得することができた。

シンポジウム1日目は先生方の講演と梨花女子大学の学生との親睦会が開かれた。親睦会では行われたゲームで同じチームになった梨花女子大の学生と英語で交流することができ、本シンポジウムの良いスタートを切ることができた。

2日目は先生方の講演と準備を重ねてきた口頭発表だった。口頭発表は分野ごと4つに学生が分かれたが、私のセッションでは化学を専門としている学生の他に物理を専攻している学生もいたため、分野外の人に理解してもらおうプレゼンテーションの練習を活かすことができた。質疑応答では梨花女子大の先生に質問をいただいたが、その場で質問の要点を掴むことができず、悔しい思いをした。発表直後の休憩時間に個別に話をさせていただき、質問の意味を理解し、きちんとお答えすることができたのは良かった。英語での質問を壇上で瞬時に拾えなかったことが心残りとなった。その先生の質問は似たような単語が繰り返し出てくるものであり、単語だけを聞き取ればどんな質問か想像できるものではなく、接続詞、動詞が聞き取れてこそ初めて文意が把握できるものであった。これまで雰囲気英語を受け止め、返していた自分にとって、今回質問を返すことができなかつた自分と向き合うこと

で、自分のリスニング力の詰めの甘さを痛感した。しかし、質問に答えることができなかったことが良い方向に働いた。個別にお話しさせていただいた中で、質問にただお答えする「1往復の会話」ではなく、より深く実験内容に切り込んで「議論」することができた。私が目的としていた英語でのディスカッションだった。合成反応に使用する試薬の種類について具体的な助言をいただくことができ、過去失敗した反応に再度挑戦できる可能性が見えた。この口頭発表を通じて英語での発表力はもちろん、研究について英語で議論する貴重な経験をし、助言までもいただくことができた。一方、座長を務めさせていただいたが、発表者と質問者の橋渡し役として発表者の英語での回答を助けることができたならなお良かったと反省している。質問者と発表者の間に入って発表者に英語をわかりやすい言葉に置き換えて伝えなかった場面でも、専門用語が含まれる質問を自分が理解できず、力不足を突きつけられた。伝える能力ももちろん必要だが、それ以前に、相手が言っていることを理解することが会話の始まりであることから、リスニング能力の重要性を身を以て感じた。

3 日目は午前中にポスターセッションを行った。梨花女子大、日本女子大の学生の研究内容を短時間ながら多く知ることができた。本学では行われていないような分野の研究もあり、新鮮に映った。自分とはまったく異なる分野の研究に熱を注ぐ学生の姿は刺激的だった。学会では内容は異なるものの、同系列のくりに収まる研究が目立つため、本ポスターセッションは異分野の研究を知る貴重な機会となった。また、ポスターセッションでは疑問点を即座に示していただけだったので、全体を終えてから質疑を受ける形の口頭発表では把握しにくかった、どこの説明が不足し、つまづかせてしまっていたかを明確に知ることができた。

私にとって初めての韓国訪問であった。この3日間を通して韓国料理を楽しむほか、韓国国内での日本語の広がり、生活文化を体験することができた。

本シンポジウムに参加したことで、「伝わる説明」がいかなるものか、どのような心がけが必要かを学ぶことができた。また実際に英語で発表することで自分のリスニング力の足りなさを実感し、これからの課題の発見につながったことは大きな収穫であった。シンポジウムとその準備を通して感じたこと、得たものは間違いなく今後の研究生活、そして社会に出てからも役立つ。新たな課題を意識しながら研究に励んでいく所存である。

最後に、口頭発表にあたりプレゼンテーションをご指導くださったグホ先生、参加にあたり諸手続きをしてくださった相川先生をはじめとする本学の皆様に厚く感謝申し上げます。また、会場設営や食事の手配までもしてくださり、日本からの学生を温かく迎えてくださった梨花女子大の皆様に心より感謝申し上げます。本経験を糧に、今後も精進してまいります。

## 第 8 回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 村瀬 真央

所属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科理学専攻 (指導教員(supervisor): 矢島知子)

発表(Presentation): Photoinduced Perfluoroalkylation-Dehydrofluorination Reaction of Aldehydes via Enamine Intermediate

12月12-14日の3日間開催された第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加させていただきました。今回、このシンポジウムが、私にとって初めての英語での口頭発表の機会となりました。

もともと英語に苦手意識があったため、英語での発表に対し不安でいっぱいでしたが、この英語への苦手意識を少しでも克服できたらと思い、今回のシンポジウムの参加を決意しました。

参加前、約2ヶ月間、英語のプレゼンテーション法の授業を履修し、授業内で英語の発表練習を何回かしてきましたが、最初は、英語の質問を聞き取ることや、自分の言いたいことを英語で伝えることが難しく、とても苦勞しました。しかし、授業を通し、見やすいプレゼンの作り方、わかりやすい題の付け方、細かいスペルなどをたくさん丁寧にご指導いただき、約1週間前には、リハーサルもあったので、英語と触れ合う機会が自然と多くなり、徐々に準備を進めていくうちに、英語での口頭発表に少し自信が持てるようになりました。

初日、金浦空港を経由し梨花女子大学に向かいました。まず、最高気温がマイナス台という韓国の寒さに驚きましたがそれ以上に、梨花女子大学の規模の大きさ、設備の充実に非常に驚きました。広大な大学内に、コンビニやカフェ、レストランや銀行など十分に生活できるほどの施設が並んでおり、さらに、学食も、豊富なメニューが揃っており、非常に新鮮でした。1日目は、梨花女子大学の学生さんとの交流会がありました。梨花女子大学の学生さんはみんな明るくて、気さくに話かけてくださったので、簡単な英語でのコミュニケーションをとることができ、不安も吹き飛びとても楽しい時間を過ごせました。

2日目は、各分野ごとに口頭発表を行いました。梨花女子大学の皆さんは、英語をすらすら話しており、英語の質問にも的確に応答しており、発表が非常にスムーズでした。そんなハイレベルな梨花女子大学生の発表を聞いて、少し不安になりました。そして、私の発表。多少のミスはありましたが、最後まで練習通りに発表することができました。しかし、苦手とする英語での質疑応答では、聞き取れない英語の質問もあり、同室の日本女子大学の先生やお茶の水女子大学の学生さんに助けをもらい、身振り手振りで何とか答えることができました。今回の発表を通し、英語を聞き取る能力、英語で言いたいことをアウトプットする能力の未熟さを思い知りました。そして、英語の質問に対応できなかった時の対処法や、想定される質問の答えを英語ですらすら答える練習をもう少ししておくべきだったと反省しました。今回の発表を通し、母国語でない言語で伝えたいことを言うことの難しさ、英語でのディスカッションすることの難しさなどを実感しました。これらの反省点を生かし、今後の発表で生かしていきたいと思えます。

3日目は、ポスター発表を行いました。前日の口頭発表は分野ごとにディスカッションする部屋が分かれていたので、ポスター発表時は他分野の研究も聞くことができ、興味深かったです。日本女子大学の学生さんも何人か聞きに来てくださり、大学間の交流もはかれ、研究のディスカッションができ、良い経験となりました。さらに、自分の分野と異なる学生さんも聞きに来てくださり、自分がしている研究内容を、他分野の方にわかりやすく伝えることの難しさを実感すると共に、よりわかりやすく物事を伝える良い練習になりました。また、梨花女子大学の学生さんは、前日の口頭発表だけでなく、ポスター発表もレベルが高く、私がぎこち



ない英語で質問しても、的確に分かりやすく、スムーズに返答してくれました。刺激を受けた、非常に良い経験となりました。

私は、これまで、学会で数々のポスター発表や口頭発表を行ってきましたが、英語での発表、そして、韓国に行くことも初めてでした。これまでに、日本で開催された国際学会に参加させていただいたこともありましたが、その時も日本の発表者は当たり前のように英語で自らの研究内容をスムーズに伝えており、海外の方とディスカッションしていました。また、先日参加させていただいた学会では、光栄なことに、海外の教授から話しかけていただきましたが、私の英語のコミュニケーション能力が未熟であったため、十分なディスカッションを行うことができず悔しい思いをしました。英語でコミュニケーションが取れること、自分の研究内容を日本語以外の言語で伝えられることは、世界を広げてくれると共に、研究の幅を広げられると考えています。特に、今回のシンポジウムを通し、それらを実感しました。これまでもそうですが、今回の日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加したことで、改めて、自分の英語のレベルや研究のレベルを実感しました。しかし、より一層英語の勉強へのモチベーションが高まったので、努力したいと思います。シンポジウムに参加したことで、たくさんのことを学び、非常に貴重な経験になったと感じています。一生忘れないと思います。

また、この3日間の滞在中、改札で止められてしまったり、英語がうまく伝わらなくて不安になる場面も多々ありましたが、言葉だけではなく、身振り手振りで必死に伝えようと努力したところ、わかってもらえる部分もたくさんありました。英語の能力を高めることも非常に大事ですが、それ以前に、伝えたいという気持ちが相手にきちんと伝わるかどうか也非常に重要だと感じました。

今回、このような貴重な経験をさせていただけたこと、また、英語の話し方だけでなくプレゼンテーション方法など細かく丁寧にご指導してくださった Gouraud 先生に深く感謝いたします。そして、3日間、会場の設営や食事の手配をしてくださった梨花女子大学の学生、先生方、本当にありがとうございました。この3日間で学んだことを生かし、これからも、日々精進したいと思います。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 叶野 花菜子

所属(Affiliation): 理学専攻化学生物化学コース (指導教員(supervisor): 矢島 知子)

発表(Presentation): Fluorine-containing low molecular gelator

私は、昨年の日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加した研究室の先輩方を見て、自分も日韓3女子大学合交流同シンポジウムに参加して、英語でのプレゼンテーション能力を向上させたいと思っていました。しかし、授業での発表練習では、ただ英語を使って発表するだけでなく、自分とは全く異なる研究背景の人たちにどうしたらわかりやすく、専門的すぎず、自分の研究を伝えられるかに苦労しました。逆に、他の人の発表を聞く際は、自分とは違う研究内容を、英語で聞くため理解が大変でした。しかし、人の発表を聞くことで、どのようなスライドを心がければわかりやすくなるのか、どこを強調して話せばより分かりやすい説明になるのかなどの日本語での発表でも使える技術を身に着けることができたと思います。



韓国に到着してすぐは、日本語の流れる韓国の電車内にあまり国外にいるという意識がありませんでした。しかし、改札機に引っかかってしまった友人があまり英語の通じない状況で身振り手振りを交えて駅員さんに説明しているのを見て、海外にきたことを自覚しました。梨花女子大学についてからはまず、大学の広さに圧倒されました。初めての学食では注文に戸惑いましたが、生協の店員さんが簡潔な英語で説明してくれたおかげで何とか購入できました。懇親会では初めは何の会話をしてもよいか分からず、日本人同士での会話ばかりをしてしまいましたが、夕飯の席で隣に座っていた梨花女子大の学生さんが話しかけてくれたおかげで、梨花女子大学の学生さんとも会話をすることができました。梨花女子大学の学生さんはみんな英語がうまいだけでなく、将来のことをちゃんと考えて進路選択をしていたり、自分の子供を育てながら博士後期課程への進学を決めていたりして英語以外もしっかりとしているのだなと考えさせられました。

2日目の発表はセッションごとに分かれ、小さな教室で行われました。和やかな雰囲気でも緊張もせず、発表もしやすかったです。自分の発表は緊張でいつもに比べ、少し速く話してしまいましたが、余った時間でたくさんの質疑応答ができたと思います。いつも自分が日本語で回答している内容について質問されたときは、日本語ならすらすら話せるのですが英語だと細かな分子配列に関する説明をするのは困難で、解答用のスライドや英語で説明する練習をもっとしておけばよかったと反省しました。自分以外の人の発表では積極的に質問しようと集中して聞いていましたが、梨花女子大学の人の英語は速く流暢で聞き取りに苦労しました。また、異なる分野の研究を行っている人への質問は、的外れなことを質問しているのではないかと思います。不安になりましたがセッション終了後、同じ疑問を持っていた人もいたようで安心しました。自分で自分の研究を英語で紹介することも難しいですが、それ以上に、人の発表を英語で聞いて理解して、それに英語で質問をすることも難しいということが分かりました。

3日目はポスター発表がありました。私の参加した Chemical のセッションは参加者が少なく、他の研究テーマを先行している人が聞きに来てくれた際は、口頭発表と同じように説明すればよいと思っていましたが、自分が当たり前のように使っていた単語の意味が伝わらなかつたり、予想外の質問が来たりして説明するのにとても苦労しました。逆に、自分が人の発表を聞く際も自分の専攻とは異なるテーマのポスター発表を聞きに行ったので、なかなかわからないことが多く、たくさんの質問をしました。自分が分からない点について専門用語等

を使わず、英語で伝えることは苦勞しましたが、発表者の方も必死にこちらの意図をくみ取ってくれたおかげで、何とか議論をすることができました。いつもの学会では聞くことのできないテーマについて勉強する機会が得られてよかったです。閉会式では、プレゼンテーション賞をいただくことができました。まさか自分が賞を頂けるとは思っていなかったのもとても驚きました。英語のプレゼンテーションの授業でお世話になった Gouraut 先生や、発表の練習を一緒にして、アドバイスをくれた友人たちのおかげです。

三日目の午後の観光では、同じ学科の友人と韓国の観光をしました。その中で私たちが日本人だと知って日本語で話しかけて道案内してくれる方々もいました。今回の二泊三日の滞在では英語ができればどうにかなると思っていましたが、実際は英語が伝わらない場面や、自分の英語が不十分で相手に理解されない場面もありました。そのため、梨花女子大学の学生の方々や一般の韓国人の方々に助けられた2泊3日間だったと思います。

今回の日韓3女子大学交流合同シンポジウムでは、たくさんの英語での発表練習やディスカッションで英語の能力が向上したことはもちろん、どうしたら自分の研究テーマを人に分かりやすく伝えられるのか、どうしたら分かりやすいスライドが作れるのかなど、発表の際に必要な多くのことを学ぶことができました。これらの点は言語を問わず、これからの自分の力になると思います。さらに、違う分野の人の研究テーマを聞くことでより広い視野が持てるようになったと思います。また、今までは人の発表を聞く際に自分から質問をすることはほとんどなかったのですが、今回の日韓3女子大学交流合同シンポジウムでは自分から積極的に質問をすることができました。今後は、今回韓国で学ばせていただいたことを活かして、言語を問わず積極的な議論と分かりやすい発表を心がけていきたいと思ます。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 佐野 萌佳

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科理学専攻

(指導教員(supervisor): 矢島 知子)

発 表(Presentation): Visible Light Perfluoroalkylation with Cyclization

今回、自分の研究を英語で発表する初めての機会でした。自分の研究を多くの人前で発表したのは、日本語でも口頭発表は卒業論文発表、ポスター発表は11月に行われた学会のみ、つまり全く発表に慣れていない状況、かつ日本語の通じない海外での英語による発表でした。また、自分の英語力に自信がありませんでした。それでも参加したいと思ったのは、英語で自分の研究を紹介する機会はめったにないため、また、より多くの場所で発表経験を積みたいと思ったからです。



シンポジウムの事前準備のため、Gouraud先生の授業では、プレゼンテーションの流れを教えていただき、それに沿ってプレゼンテーションを作成しました。しかし、それを授業で発表したところ、受講している人には有機化学についてほとんど知らない人も多く、内容が難しいと指摘されました。私の研究分野を全く知らない人でも分かりやすく、また流れを使いみやすいプレゼンテーションを作ることがこんなにも難しいことであるとは知りませんでした。また、他人の発表を聞く中で、日本語でも難しい専門用語は英語にすることでさらに難しく感じ、それがきっかけで聞き手は話についていけなくなる場合があるのではないかと思いました。そこでリハーサルまでに、聞き手にとって分かりやすいプレゼンテーションになるよう、同じ分野の人同士、どのようなプレゼンテーションなら自分の研究を理解してもらえるかを話し合いながらプレゼンテーションの作成を行いました。リハーサルではグホ先生に特に指摘されることもなく、無事に終えることができました。しかし、質問にうまく答えることができず、若干の不安を覚えながらリハーサルを終えました。

シンポジウム1日目。大学の大きさに圧倒されました。1つ1つの建物が綺麗で、建物の中は天井が高く、ゆったりした雰囲気でした。梨花女子大の学習環境の良さに驚きました。1日目は自分たちの発表はなく、先生方の講演を聞きました。自分があまり触れたことのない分野の発表は興味深いものでした。しかし、出発前と同様に、分野が違い、かつそれが英語であるためか、一度聞いただけでは理解できない部分も多くありました。講演終了後、梨花女子大の生徒の方々がレクリエーションを企画してくれていました。そこで驚いたのは梨花女子大の生徒の学生がまるで英語を母国語としていると感じさせるくらい、とても流暢な英語を話していたことです。それを目の当たりにして、自分の英語力の無さを改めて恥ずかしく思いました。終了後、学生全員で夕食をとった。その時近くにいた梨花女子大の方は、もう結婚していて子供もいると聞きました。また、他にも同じ状況の方がいました。日本だと結婚して子供もいる状況で大学へ、となるとそれを非難するような人が多いように思います。文化の違いなのか、韓国にはこのような状況であっても勉強したい、という気持ちを持ち、それを実行できる人が多く、また、そのような人を受け入れてくれる社会が作られていることが分かりました。

2日目はオーラルプレゼンテーションのセッションがありました。発表自体はリハーサル通りにできたと思います。しかし、出発前も不安を感じていた質疑応答の時、梨花女子大の先生から質問が上手く聞き取れず、日本語で他の人に確認してしまいました。また、その質問にもうまく単語が出ず、ジェスチャーに頼り、答えてしまいました。先生に理解していただけだったのでよかったものの、ディスカッションと呼べない時間となってしまいました。一方で梨花

女子大の方々の発表は、どの方も流暢な英語で発表しており、先生の質問にもすぐに自分の考えをしっかりと伝えられていました。この日は自分の準備不足、英語力の低さが露呈してしまい、本当に不甲斐なく感じました。自分の発表があった午前のセッション終了後、梨花女子大の方々が話しかけてくれました。どこの食堂がおいしい、私は日本のどこに行ったことがある、など他愛もない会話ですが、全く受け答えの出来なかった発表時と異なり、少しでも英語でコミュニケーションを取れたことが嬉しかったです。

3 日目は午前中にポスターセッションを行いました。ポスターセッションでは、梨花女子大と日本女子大の気になる研究について話を聞くことができました。分野が異なる研究を聞く機会はめったにないため、初めて知ることが多く、難しく感じました。しかし、一方で新しいことを学ぶことが出来、とても有意義な時間を過ごせたと思います。

この韓国に滞在した 3 日間で様々な分野の研究について聞くことが出来ただけでなく、韓国の文化にも触れることができたように思います。また、梨花女子大学の方々はとても賢く、勉強熱心であると感じました。その一方で自分の英語力の無さや研究に対する姿勢の違いを痛感しました。しかし、自分の研究について英語でディスカッションすること、また英語でコミュニケーションをとることによって、言語の違う人々の意見や考え方などをお互いに知ることが出来ることを改めて感じました。研究者として世界共通語である英語を身に着けることは、研究を続けていくうえでとても重要なことだと思いました。そのため、今回のシンポジウムに参加できたことは私にとって非常に良い機会になりました。

今回のシンポジウムで自分のレベルを知ることが出来き、今後の英語の勉強を行うモチベーションの向上に繋がりました。これをきっかけに今後は悔しい思いをしないためにも、英語力の向上、また研究へ邁進していこうと思っています。

最後になりましたが、今回、このような機会を頂けたこと、またご指導をくださった Gouraud 先生、そして、3 日間の会場設営、朝食、夕食の手配をしてくださった梨花女子大学の学生、先生方、本当にありがとうございました。この経験を活かして、研究者として更なるレベルアップが出来るよう日々精進したいと思います。

参加者名(Name): 寺島 千絵子

所属(Affiliation): 理学専攻化学・生化学コース (指導教員(supervisor): 森 寛敏)

発表 (Presentation): **Intermolecular interaction of *p*-nitroaniline in super critical CO<sub>2</sub>: Theoretical study on solvatochromism**

数式は世界共通の言語だとよく言われるが、必ずしもそうではない。 $y=ax$  の単純な式であっても、 $y$ ,  $a$ ,  $x$  がそれぞれ何を表しているのかが示されなければ、化学としては何の意味もない数式になってしまう。わたしの専攻する化学において最もありうるのは、グラフの縦軸、横軸が何であるか示されなければ、その図はただの、意味のない直線か曲線などになってしまうことである。そこへ、横軸は波長であり、縦軸は頻度である。描かれた曲線は対象分子の吸収波長を EFP-MD と FMO-EOM-CCSD を組み合わせて再現したものである、とここまで説明して初めて、同じ計算化学を専門にする方にとって意味あるグラフとして見てもらえるのである。

さて、この説明で果たしてこの説明で一体化学を専攻する者のうち何名がああなるほどと納得して下さるだろうか。おそらくはごく少数だろう。MD と FMO くらいであれば計算化学を専攻していない方でも聞いたことくらいはあるであろうが、特に各自の専門すら勉強中である学生の身において、他分野の専門用語まで深く理解しているという方が無理である。では、次に言葉を費やすべきはこれらアルファベットの羅列に対し、分子動力学や量子化学計算の手法の一つであると説明を加えることである。すると、次にでは何故それらのややこしい手法をあえて取り入れたのか、と疑問が浮かぶ。当然その至極まっとうな質問に対し、言葉で説明しなければならない。

科学の考え方は、例えば、はるはあけぼのなつはよる、と季節に対する感性のような人により、国により違って当然なものとは異なり、どこにいても、誰にとっても共通のものである。化学を専攻する者にとって、炭素と酸素、より電子を引き付けるのはどちらであるかと問われれば、よほど特殊な系を想定しない限りにおいてはみな酸素と答えるだろう。数式にも、考え方にも国という境はないのである。では、果たして誰に対しても *sanso* と答えて、その解答に頷いてもらえるだろうか。

おそらく難しいだろう。日本の中において、日本の方と話している限りは通じるだろうが、一歩外に出てしまえば誰にも伝わらない。下手をすれば、そもそもにして質問をこちらが聞き取れない、理解できないことだってありえる。わたしが一生懸命に日本語で返事をして、相手の方は一生懸命に韓国語で言葉を並べても、互いに苦しいだけである。なぜなら数式も、考え方も世界共通であっても、それらを説明する言葉は世界共通ではないからである。

では、わたしは例えば韓国の方には韓国語で、フランスに行けばフランス語、ドイツへ行けばドイツ語で、インドへ行けばヒンドゥー語で話さなければいけないのだろうか。可能ならばそれが理想ではあろうが、残念ながらそれは難しいだろう。通訳を専門にする方でもない限り、参加国語も話せれば素晴らしいものである。わたしにはとてもできない。では、通訳の方を連れて行くのか。たとえば国際学会において、すべての学生が。それも不可能に近いだろう。

エスペランサに変わり、いまや世界共通の言語となった英語を一つ覚えていたらどうであろうか。わたしがどうにか英語で返事をして、相手の方もどうにか英語で質問する。わたしにとってはこれでも十分に難題であるが、ひとたびこなせばこの相手というのは誰だって構わないのだ。会う人、会う人に対しなんども言葉を覚えなおす必要がない。英語一つ覚えてさえおけば、誰に対しても言葉が通じるのである。これでようやく、数式も、考え方も、それらを説明する言葉も、世界共通となりえた。これをもって初めて、わたしの研究を人に伝えることができる。

未だ計算化学の世界に足を踏み入れて一年と少しであり、再来年には就職して、全く別のことをしている身ではあるが、この短かな時間で、わたしは数式と考え方を勉強してきたつもりだ。今回のシンポジウムで発表した研究も別な学会で口頭発表を行うなど、一定の成果はえているだろうと自負している。しかしながらこの先、わたしはさらに深く数式と考え方を学ぶだけで良

いのであろうか。

どれほど素晴らしい研究であろうと、理解されなければ、人に説明し、評価されなければただの空論である。有名な例では地動説であったり、研究とは外れるが宮沢賢治、ゴッホと死後に評価された芸術家も多い。彼らは自身の目で日の目を浴びている様を見ることなく没しているのである。もしかすれば、未だ埋もれたままの大発見、大発明はいくらでも転がっているのかもしれない。

科学者として、化学に貢献するものとして、自身の研究を外へ発信することは義務である。人に知ってもらい、人に使ってもらうことで初めて、意味のある研究となりえる。わたしの研究室では発表の準備を念入りに教えてくださるところで、スライドが見やすいように、誰が聞いてもわかるように、伝える順番は、説明しなければならぬ背景知識はと細かく考えるようにしている。中身を用意して、内容を吟味してとそれだけで大仕事である。しかしながら人に伝えるための入り口には、まず、言葉の壁が待っている。

韓国の学生の皆様は、非常に外国語を学ぶことに対し熱心であることがうかがえた。英語は当然のこと、日本語を勉強中だという方も大勢おり、流暢な日本語を披露してくださった。対してわたしは、韓国語は二、三単語しかわからず、英語もおぼろげである。内容においては誰にも遅れを取らないつもりでいたが、最初の壁を越せていない。おそらく、韓国の学生の皆様は科学に対し、伝えることを重視しているのだろう。もちろん内容も大変深く、興味深いものであったが、今回のシンポジウムにおいてわたしが最も強く印象に残っているのは彼女らの言語に対する熱い関心である。それは、もしかしたら自身の専攻を深く理解するより先に重要であるのかもしれない。

わたしは今回の日韓三女子大学交流合同シンポジウムにおいて、準備の段階から発表、ポスターまで、一貫して自身の英語の未熟さを強く実感した。特に、聞いて話すことに関してはほとんど何も練習してきていない。誰とでも対話ができ、互いに理解し合う能力は将来何をやるにしても重要であり、わたしと相手の方の間に挟まるのは当然英語で聞き、話す力だろう。

残り少ない学生期間において、ただ自分の頭の中で難しいことを考え続けるだけでなく、その考えを外へ発信していくための手段として、対話に使える英語を身につけていくという目標を得るための、充実した三日間であった。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 八日市屋 朋子

所属(Affiliation): 理学部物理学科 (指導教員(supervisor): 鷹野 景子)

発表(Presentation): A Theoretical Study on Si-H Bond Activation in Oligosiloxane Synthesis

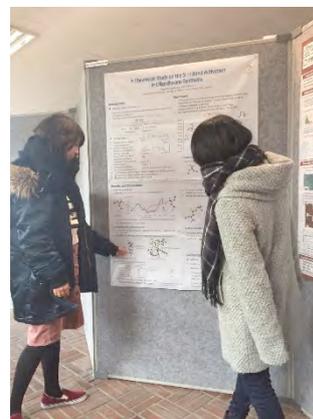
私は、2017年12月12日から14日に行われた日韓3女子大学合同シンポジウムに参加しました。今回応募をしようと思った動機は、海外で研究発表をしてみたかったからです。4年生になり研究室に配属され、それから半年ほどの間に自分の研究を発表する機会はたくさんありました。しかし、いずれも研究室のメンバーに向けてであったり、学科での発表であったりと、いわゆる自分のホームグラウンドで、そしてある程度専門が同じ人たちの前での発表であり、もっと違う場所でも研究発表をいつかしてみたいと考えていました。そんな中このシンポジウムの募集が始まったことを聞きました。対象分野が科学という大きな枠組みであるという点、また日本女子大学と韓国の梨花女子大学との合同であるという点に大きな魅力を感じました。

まだ研究を始めたばかりの私でも、聴衆側の専門分野が多岐に渡るため発表しやすいのではないかと思い、さらに英語で発表をする経験をしてみたいと思いました。そして応募をし、運良く採用していただくことができました。

私にとって初めての、大きな場での研究発表、そして英語での研究発表の機会であったため、準備段階では非常に苦勞をしました。私は英語が得意ではなく、その面で苦勞することは予想通りでしたが、一番難しいと感じたのは、専門がまったく違う人たちに自分の研究を説明する事です。10月から約2ヶ月間、授業ではほかの履修者たちに向けて、英語のプレゼン練習をしましたが、その際に受けた質問が私の中で印象に残っています。聞かれた内容は私にとっては当たり前のことで、そのような質問が出ることに驚きました。私は、自分のよく知らない分野の講演の際に、一聴衆として、なぜこの単語を説明しないのか、なぜその理論を詳しく説明しないのかと、もどかしい気持ちで講演を聴くことがありました。そして自分がプレゼンする際には、必ず聴衆の目線になって、わかりやすいプレゼンをするように心がけているつもりでした。しかしその質疑応答の際に、自分がいかに自分の専門分野の視野に縛られているかを痛感しました。しかし準備段階でその経験ができたおかげで、本番の口頭発表では、より一層練られたスライド作成できたと思っており、このような授業を受けることができたこともよい経験であったと感じています。

韓国に着いた1日目は教授による講演と学生間の交流会がありました。中でも特に印象に残ったのは、梨花女子大学の教授による、新薬設計と計算についての講演です。私がずっと興味があった分野であり、非常に興味深い話を聞くことができました。普段大学生活を送っているだけでは聞くことができなかった話で、改めて今回参加してよかったと感じました。その後の学生交流会は梨花女子大学の方たちが考えてくださったレクリエーションをして交流をしました。互いに母国語が違うけれども英語で交流することの楽しさを感じました。

2日目はほとんど一日中学生たちの口頭発表がありました。私の順番は一番初めのセッションで、非常に緊張しましたが、準備の甲斐あってか無事発表を終えることができました。しかしこの口頭発表では、2つの後悔が残ってしまいました。1つ目は、何度か手元のメモに目を落としてしまったことです。初めてたくさんの知らない方々の前での発表であったこともあり緊張によって言うべきことを多々忘れてしまいました。もっと準備段階に何度も練習をしていれば、と非常に悔しい思いをしました。もう1つは、質問の回答も十分にできなかった事です。いくつか梨花女子大学の先生から質問していただいたのですが、自分の英語が拙いせいで十分に言いたいことを上手く伝えることができず、悔しさを感じました。しかし新たな



視点の質問をいただくことができ、この悔しさも含めて今後の研究に生かしていきたいと思  
います。

私は化学のセッションで発表を行いました、所属が物理学科であり物理にも興味があ  
ったため、いくつか物理のセッションにも参加をしました。どの発表も普段聞けるような話で  
はなく、非常に興味深い研究だと感じました。また、特に梨花女子大学の学生たちは、全く  
メモを見ることなく、堂々と前を向いて発表する姿が印象に残りました。日本の学生は私も含  
めてメモに目を落としてしまいがちで、韓国の学生のレベルの高さを目の当たりにし、見習  
わなければならないと痛感しました。2 日目もいくつか教授による講演がありましたが、とくに  
午後の最初にあったお茶の水女子大学の曹先生の素粒子に関する話が非常に面白い講  
演でした。専門外の人たちに対していかにわかりやすく、そして興味をもってもらうかを意識  
した内容で、私はわかりやすくする事ばかりに気をとられ、面白いと思ってもらう・興味をも  
ってもらうという点が欠けていた事に気づきました。先生方の講演も含め、2 日目の口頭発表  
では、他の分野の面白さに気づききっかけになったと思います。

最終日は朝からポスターセッションを行いました。口頭発表とは違って原稿がなく、聞きに  
来てくれた人と直接の議論になるため、非常に緊張をしました。途中で、梨花女子大学の学  
生 1 人が、専門分野が近いということで聞きに来てくれていくつか説明をしました、ここ  
でも英語で伝えることの難しさに直面しました。しかし、その後、逆にその学生の話も聞きに  
行き、互いに議論をして、さらに互いの話や日韓の違いについてなども話すことができ、非  
常に有意義な時間を過ごすことができました。

今回のシンポジウムでは、非常に多くの経験ができたように思います。専門が異なる人た  
ちに研究内容を説明するむずかしさ、英語で説明するむずかしさに何度も直面しました。し  
かし、下手なりに、なんとか伝えることやコミュニケーションをとることができるということを経  
験して、何事も下手でもなんでも挑戦することが大事だということを、身をもって学ぶことが  
できました。また、参加している方たちの分野が多岐にわたっていたおかげで、普段はなかな  
か聞く機会がないような話を多く聞くことができ、改めて他の分野を学ぶ楽しさを感じまし  
た。また、韓国の学生はもちろん、大学内の他学科の学生たちともたくさん交流することが  
でき、非常に良い機会であったと思っています。このシンポジウムによって今までなかった  
発想や視点をたくさん得ることができました。今後の研究活動に大いに生かしていきたいと  
思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった、お茶の水女子大学の先生方をはじ  
め、日本女子大学・梨花女子大学の先生方、そして学生の皆様に心より感謝を申し上げます。

---

参加者名(Name): 米村 美紀

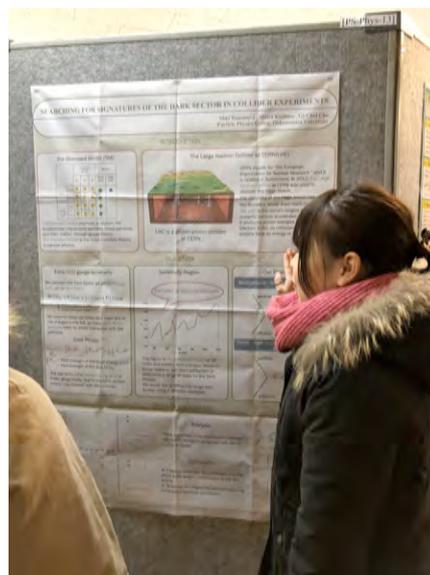
所属(Affiliation): 理学専攻物理科学コース (指導教員(supervisor): 曹 基哲)

発表(Presentation):

Searching for signature of the Dark Sector in Collider Experiments

---

私は、この日韓3女子大学交流合同シンポジウムで研究発表をする機会を得たいと思い参加しました。初めてのプレゼンテーションを英語で行うというのは私にとって高いハードルでしたが、それを乗り越えることで成長につながるだろうという期待がありました。そして実際に行ってみると、期待以上の反省や学びを得ることができました。



まず準備の段階から、他分野の人にもわかりやすい構成にするための工夫がどのようにできるかを悩みました。学内リハーサルではオーディエンスの反応もあまりなく、他人に上手く伝えること、まとめることの難しさを感じました。しかし後輩や他分野の友人、英語の添削をしてくれたエドワード・フォーリー先生と指導教授である曹先生のアドバイスをもとに伝え方やスライド(見せ方)を改善したことにより、他分野の人にもわかりやすく発表資料を作ることができました。専門分野以外の人と交流し、自分の研究について知ってもらおうと努力することは、自分の研究を見直すきっかけになり、頭の整理にもなると体感することができました。

シンポジウム当日は、初めての韓国にたくさんの刺激を受けました。シンポジウムでのセッションの参加だけでなく、違う文化に触れられたことが特に良かった点です。生まれて初めてマイナス10度以下の気温の中で生活することも、なかなか面白い体験となりました。食文化の違いも大きく、よくわからないうちに激辛料理を注文してしまうという事件もありました。とはいえ、やはりセッションからの学びは特に多く、たくさんの反省がありました。

初日と2日目に行われたプロフェッサー・セッションでは専門的な知識を詰め込むのではなく、教授の「人の興味関心を引こうとする工夫」を感じました。もちろん英語でのプレゼンテーションは発音の綺麗さや語彙力も大切ですが、それよりも、よりわかり易く自分の言葉で伝えようとする必要があると気付くことができました。教授は場の雰囲気に応じて、オーディエンスの理解が不十分であると思われるときには、説明を加えたり言葉を言い換えたりされていました。実際に自分がしようとしてみると、それらがとても難しく練習が必要だと気づきました。その意識の差を2日目の自分の研究発表で感じました。

2日目に行われた学生の研究発表セッションで一番印象的だったことは、韓国の学生の発表が聞きやすかったことでした。彼女たちはとても英語が上手でした。しかしそれよりも大事なのは英語の発音や細かい文法ではなく、やはり他人にわかりやすく伝えようとする姿勢であると再認識しました。

一部の学生、特に韓国の学生は発表の時にメモなどを見ず、オーディエンスと自分のスライドを見ながら喋っていました。そうすると自然と聞く側も発表者に集中でき、発表者がスライド

に注目すると聞いている私たちも同じ場所に注意を向けることができました。そしてそれが発表の理解に少なからず寄与しているようでした。

私は今まで発表をする側に立っていなかったため、このような簡単なことに気づいていませんでした。この日は、他の上手な学生と同じように発表することができるほどにはまだ練習もできておらず、覚悟も足りていませんでした。我ながら不甲斐ない発表になってしまったと反省しましたが、それを生かしてポスター発表をしようという気持ちに切り替えて翌日に臨みました。

3日目に行われたポスター発表は廊下での発表ということもあり寒さに耐えながらのセッションでしたが、多くの学生たちが興味を持って聞きに来てくれたことが嬉しかったです。2日目の反省点を踏まえてポスター発表では、聞きに来てくれた人のバックグラウンドに合わせて話を始めることができました。ポスター発表はオーラル発表と違い、その場で相手の反応を確認しながら話せたことで、前日よりも手応えを感じました。全く違う分野の学生に自分の研究を評価してもらえたことが意外でもあり、嬉しくもありました。

今回参加して得た気づきや反省を、今後の研究発表やポスター発表に生かしていきたいです。たくさん学びをくれたこのシンポジウムに、また機会があれば参加させていただき成長を見せられたら幸いに思います。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 速水 香奈

所属(Affiliation): 理学専攻物理科学コース (指導教員(supervisor): 曹 基哲)

発表(Presentation): The Possibility of the Grand Unification in MDM

12月12日から14日までの3日間、韓国の梨花女子大学にて行われた日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加してきました。今回私が参加した主な目的は、人前で話す機会を設けること、英語を話す機会を増やすことの二つでした。

シンポジウム参加にあたり、水曜1限に開講されている英語アカデミック・プレゼンテーションの授業を受講しました。それまで英語で研究内容を発表するという経験はありませんでしたが、この授業では、最初に短い口頭発表を行い、その後段階を踏みながら12分のスライド作りに入ったので戸惑うことが少なかったです。作ってきたスライドを授業中に他の人に見せるのですが、専門の異なる人に12分で伝えるということがとても難しいのだということを改めて実感しました。しかし、理解しづらいところを指摘して貰うことで、大きくスライドを改善できました。特に私の分野は抽象的なものを扱い、数式が多く出てきてしまうので、できるだけ式を減らし、図を多く取り入れイメージが伝わるような工夫をしました。その授業の先生からも発表の際の姿勢、話し方など普段気づかないくせやよりよく伝えるためのアドバイス、アクセントなどの細かい指導をいただきました。10の36乗のような日常会話ではあまりでてこない言葉の言い回しなど、調べても様々な言い方が出てきてしまって困っていた時に助けていただくこともありました。



大学で行ったリハーサルでは、本番と同じように時間を計り、質疑応答を行いました。このとき、指導教官からGrand Unificationの概念、目的が聴衆にまだ理解しづらいようだという指摘を受けました。もう大分改善できたと思っていたので悩みましたが、日本語と英語で文章を考え直し、同じ授業を受けていたメンバーや研究室の人に改めて聞いてもらい、さらなる改善をしました。このとき、言い換えたり言葉を噛み砕いたりすることで、自分の理解もまた深めることができました。

韓国では、オーラルとポスターの発表を行いました。オーラルでは、各分野ごとにセッションが分かれています。私は物理以外を専攻している人でもわかるよう一般向けにスライドを作っていたので少し丁寧すぎたかもしれませんが、同じ素粒子物理を専攻している人がほとんどいなかったのが良かったと思っています。私の参加したphysics and Applied Scienceのセッションには学生15人程度、先生方4人程が参加していました。専門外の発表が多く、完全に理解することは難しかったのですが、普段聴くことのできない話をたくさん聞くことができたのはとても興味深かったです。自分の発表に関しては、アクセントの確認を行い、話の区切る点を意識して臨みました。特に、日本語にもなっている英単語はアクセントを勘違いしていることが多々あり、授業でも指摘されていたので気をつけました。実際の発表の際には、途中から焦ってしまったことが少し心残りです。ここは今後の課題であると感じています。また、会場では自分のパソコンが使えず、備え付けのコンピュータを使用しました。当たり前ですが言葉が全て韓国語になっているので最初戸惑いましたが、休み時間中にスライドファイルを移しておいたので、発表直前にあまりバタバタせずすみしました。

ポスター発表では、オーラル以上に様々な専門分野の人がいたこと、オーラルに比べ練習が少なかったことがあり、難しく感じました。ですが、一般向けに作ったスライド準備が役に立ちました。また、互いに質問しながら発表することからも学ぶことが多かったです。わかりづらい箇所を何度も説明し、言葉を丁寧に選ぶので、自分の中でもより思考が整理されたように思います。相手の分野との意外なつながりなども面白い発見でした。自分が他の参加者の発表を聞く側に回った時も、専門外の話でも理解しやすく、自分の大学にはない研究分野の発表や他

学科の発表を聞くことができたので、視野が広がりました。ただし残念だったのが、韓国の学生の参加者が少なく、時間も2時間程しかなかったため、韓国の学生の発表をほとんど聞きに行くことができなかったことです。また、前日の質疑応答で時間が足りず、うまく答えられなかった韓国の方と、もう少し discussion できたら良かったです。

韓国の学生さんとは、banquet やちょこちょことしたタイミングで交流できたのですが、とても楽しかったです。どの方もとても友好的でした。日本に行きたい、もう既に何回か行ったことある、という方が多く、ちょっとした韓国語を教えてもらったり、逆に日本語を教えたり、オススメのお店や調味料を教えてもらいました。

また、学生の発表だけでなく、日韓双方の先生方の発表を聞くことができたのもとても勉強になりました。やはり、先生方は慣れていらっしゃるので、わかりやすく、スライドも参考にできる点多々ありました。特に、自分の指導教官のプレゼンテーションを聞いたときには、わかりやすく伝える言い換え表現、時には厳密ではないけれどイメージしやすい言葉、表現を効果的に使って説明していたことなどが、とても参考になりました。

今回のシンポジウムは、とても学ぶことの多いものでした。発表の仕方や、日本語英語であってもアクセントや言葉の区切りを少し意識するだけで伝わりやすさが大きく変わることなど、授業やシンポジウム中に聞いたたくさんの発表から身をもって学ぶことができました。最初の目的であった人前で話す機会を設けること、という点では、さらに英語で話す、質疑応答を行うという私にとって少しハードルの高いものではありましたが、良い経験になりました。英語を話すことへのためらいも減りました。自分の研究という点でも、改めて見つめ直し、理解が深まる機会が多くありました。同じ専門分野の人と話している時には当たり前になっているもののなかには自分の中で日本語としても曖昧になっていることがありました。とっさにうまく英語で置き換えられないことがあったので、日々もっと言語化していくこと、さらに、ただ言語化するのではなく、言葉をもっと厳密に使う大切さを感じました。この気づきを日々意識して研究に臨み、学んだことを今後活かしていきたいです。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

---

参加者名(Name): Shoko Okada

所 属(Affiliation): Advance Sciences, Computer Science (指導教員(supervisor): Kazue Kudo)

発 表(Presentation): Phase Transition in a Recommendation Problem Based on Set Covering

---

I studied in the United State for ten months to study business; however, I have never presented about my research in English abroad before. Therefore, I wanted to attend this symposium to get an opportunity to present about my research overseas. Also, I fainted during my presentation about four years ago. Afterward, I was always too nervous when I gave a presentation. Thus, overcoming my anxiety was one of my goals in this symposium.



Before the symposium, I attended a presentation class on Thursday mornings and prepared my presentation with my classmates. We started from introducing ourselves in English for five minutes and then gave an eight minutes presentation about our research. Thanks to the class, I was able to get some advice from both a professor and my classmates, to learn from others' presentations and to improve my own presentation. We had a rehearsal for the symposium as well. I was selected to be a chairperson in one of the sessions. This was the first time to take the chair in English so it was challenging but also a good experience for me. I was able to see many presentations in the rehearsal. It was hard to understand the presentations of the different fields, but the presentations were quite interesting and instructive.

The symposium lasted for three days and we had professors' oral sessions, students' oral sessions and a poster session. The students' oral sessions were divided by four sessions: Mathematics and Statistics, Physics and Applied Sciences, Chemistry and Nano Science, and Life and Pharmaceutical Sciences. My major is Computer Science and I participated in the Mathematics and Statistics session.

On the first day, we had two professors' sessions. Their departments were different from mine but it was interesting to hear about the other researches. Moreover, I was able to learn how to take a chair in English through the sessions. Thereafter, we had a reception. We had a fun game among students in the reception. We made seven groups out of three universities' students and enjoyed a gesture game. The game helped talk with people from both different fields and universities. It was a nice icebreaker. We enjoyed a diner and talking in a Chinese restaurant as well.

On the second day, I took a chair in two of the Mathematics and Statistics sessions. Many students from Mathematics fields and their contents were hard to understand for me. I only asked about basic things of Mathematics as a chair. I was very glad that they kindly answered my questions even though I asked about just basic things. I also enjoyed hearing about some presentations of the Computer Science field. I found out, thanks to other computer scientists, we have some significant development such as holographic keyboards and secure calculation in a short time. Other presenters were very impressive and motivated me to research harder after the symposium. I had anticipated presenting in a small classroom but I had to present in a big hall, which made me a little nervous. However, thanks to the presentation classes and rehearsal, I was able to calm down during my presentation and gave

a better presentation than before.

On the third day, we had a poster session. It was really exciting to see posters from not only different universities but also the other fields. Even in Ochanomizu University, I rarely saw different fields' research. Therefore, getting insights from different fields such as food or life sciences was a precious time for me. At the end of the symposium, I won one of the best presentation awards in the 8<sup>th</sup> EJO Joint Symposium 2017. It helped me have confidence and overcome my anxiety for when presenting. After this symposium, I had a mid-term presentation in Ochanomizu University. Last year, I was too nervous. I just gazed at my presentation script and was not able to answer the audience's questions well. However, I was able to give a better presentation with confidence and answer the questions well this year. I was glad that my supervisor praised me about the presentation. I am very pleased to join this symposium and overcome my anxiety. It means a lot and gave me a positive impact. I truly appreciate all of the people who made this symposium happen and supported the presentation practice before we went there.

In closing, I would like to write about some notes for people who will go to the next symposium. First of all, Seoul is much colder than Tokyo. I had checked the weather in advance, and expected the coldness but the real weather exceeded my expectation. It was -10°C at times. It was painful rather than cold. It actually hurt all of my uncovered skin such as my ears, nose and cheeks. I had never known a facemasks help keep warm. After I arrived in Korea, I found some Koreans had black thick masks on their face. I did not know why they put such kind of masks. After I spent there, I realized they put the masks for warmth. I found out a scarf, a wool hat or a pair of earmuffs and hand warmers are necessary in Korea in the winter. Secondly, I should have learned a little Korean. Of course, people from Ewan University can speak English; however, people in some local places such as restaurants or shops cannot speak English. When I had tasty food at a restaurant, I wanted to tell the staff how I felt about the meal. Unfortunately, I did not know the word "delicious" in Korean and felt regret. Also some of the students from Ewan University can speak Japanese and were so kind. I wish I could have replied in Korean. I recommend learning some Korean in advance such as "Annyeonghaseyo (Hello)", "Gomabseubnida (Thank you)" and "Mas-issneun (Delicious)". Finally, I think Japanese should be careful with spiciness of Korean food. One of Ewan University students told us a good restaurant and she said the food is not so spicy. However, even we ordered the least spicy food at the restaurant but it was still too spicy for Japanese. It was pretty tasty anyway, but I think Japanese should be careful with the spiciness.

I had some difficulties with the coldness, language and spiciness as I wrote above, but it was a good opportunity to learn new culture. I found body language could communicate many things even though people do not speak common language. The symposium was very valuable in both ways: to learn other research fields and different cultures. I deeply appreciate all of the people who gave me a chance to participate in this symposium.

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 山田 優輝

所属(Affiliation): 理学部情報科学科 (指導教員(supervisor): 小口 正人)

発表 (Presentation): **A Method for Accelerating Genome Secure Search Implemented with Fully Homomorphic Encryption**

十二月十二日から十四日にかけて開催された第八回日韓三女子大交流合同シンポジウムに参加し、ソウルの梨花女子大にて口頭発表とポスター発表を行った。私がこのシンポジウムへの参加を希望したのは、韓国の文化に触れること、英語での研究発表を経験すること、他分野の研究に触れて幅広い知識を得ること、などを目的としてであった。学部生であるため研究の成果が十分に出ておらず、参加学生として選ばれるかどうか、また選抜された後も適切な発表が出来るかどうか不安であったが、要旨の添削やプレゼンテーションの授業を通して多くのご指導を賜り、自信を持って参加することが出来た。その結果としてこれらの目的も達成出来たように思う。以下に今回の活動とそれを通して得た学びについて報告する。



シンポジウムへの参加条件のひとつとして、事前に英語での研究発表を学ぶ授業を履修することがあった。自分の研究分野やその重要性について、背景知識を持たない聴衆にどのようにして理解してもらうか、という点については参加者の多くが苦勞していたが、私は研究発表そのものが初めてでもあったため、プレゼンテーションの際に何を重視したらいいのかなどの基本的なことさえも分からなかった。そのためこの授業で発表の準備をし、フィードバックまで頂けたことは非常に有意義であった。スライドの構成や英語の表現を修正していただいただけだけでなく、発表している様子を動画で撮影して確認したり、受講者が互いの発表にアドバイスし合ったりしながらプレゼンテーションの作法を学ぶことが出来た。授業を通して、私が特に気を配るよう指導を受けたのは、専門用語の発音と話すスピードである。自分ではゆっくり話しているつもりでも、内容を理解しながら聴くには早すぎてしまうことが多く、間の置き方や抑揚などを意識しつつ何度も練習を重ねた。

その甲斐があって、当日の口頭発表では焦ること無く、アイコンタクトにも気を配りながら発表することが出来た。情報科学ではなく数学や統計について学んでいる学生が多かったため、限られた時間の中で出来るだけ丁寧に、しかし内容がきちんと伝わるように意識しながら説明をした。先生方や他の参加者の発表からも様々なことを学び、自分の課題を見つけることも出来た。今後の発表に活かしていきたいと思う。口頭発表は分野ごとに別れて行われたため、ポスター発表では主に他分野の参加者の場所を回り、研究内容を説明してもらった。研究の内容も興味深かったが、自信を持って堂々と楽しそうに話す姿に感銘を受けた。私自身のポスターについても何度か説明をしたが、概要を書いたり口頭発表の用意をしたりする中で理解が深まっていたのか意外とスムーズに話すことが出来た。これは参加前には予想していなかった収穫である。研究分野の近い梨花女子大の学生から質問を受けもした。

せっかくこのような機会を頂いたのだからと、シンポジウム以外の時間も貪欲に活用した。事前学習の授業や説明会で知り合った人だけではなく、空港で初めて出会ったお茶大生ともよく話し、夜は日付が変わる頃まで明洞の繁華街を歩き回ったりした。上の写真はその時のものである。学内のサークルに所属したりしない限り他学科の人と交流する機会はありません。同学科からの参加者が少なかったこともありほぼ全員と初対面からのスタートであったが、話題の尽きない楽しい時間を過ごすことが出来た。梨花女子大や日本女子大の学生だけではなく、学内からの参加者とも学年を超えて仲を深められたように思う。

また、私が韓国を訪問するのは今回のシンポジウムが初めてであった。初めに今回参加を申し込んだ目的の一つとして韓国の文化に触れることを挙げたが、これは最近の大統領周囲の不祥事や慰安婦問題などの報道とそれに対する人々の反応とを受けて、実際の韓国を自分の目で見てみたいと思ったからであった。早朝に羽田を出発してから約二時間後、飛行機を降りてまず空港の綺麗さに驚いた。日本の駅や空港はいつもどこかで工事が行われており煩雑な印象を受けるが、金浦空港やそこからソウル中心に向かう電車は新しいのか清潔で快適、更にお洒落で近代的であった。空港から電車に乗り一度だけ乗り換えると、シンポジウム会場である梨花女子大の駅に着く。今回は学校の近辺しか周訪れなかったが、町並みや雰囲気は日本とよく似ていおり、気温が低いことを除けば海外渡航経験に乏しい私でも歩きやすい都市であった。こうして学校に到着するまでのわずか一時間ほどで、私は元々持っていたイメージの陳腐さに気付き、それに全く当てはまらない生の隣国を知った。様々なメディアで取り上げられる「韓国」しか知らず自分から積極的に情報を得ようとしてもしなかつたため、今まではどこか遠い印象を抱いていたが、上記の交通機関や町並みを始めとし、夕方頃から活気づく屋台や街中に溢れるコスメショップ、サラダバーに盛られた漬物など、日本とは異なる文化に囲まれて三日感を過ごしたことで、親近感が芽生えたように感じる。梨花女子大及び日本女子大の学生と一緒に交流レクリエーションや研究発表をし、食事をしながら酒を飲み、拙いながらもお互いの母国語ではない言語で交流をすることで、初めて韓国という国やその文化についての色を持った情報を得ることが出来たのである。与えられる情報をただ鵜呑みにするのではなく、今回得た生の感想を大切にしていこう、とこの報告書を書きながら改めて思った。

本シンポジウムを通して様々な文化に触れると同時に、自分の興味関心を広げて掘り下げることが出来た。参加者から多くの刺激を受け、研究や英語の学習に対するモチベーションを得られたと思う。今後も今回の経験を活かして意欲的に研究に取り組むとともに、日韓の交流に何らかの形で貢献できるよう努力していきたい。末筆ながら、本シンポジウムに参加するに当たり多くの方々のご尽力、ご協力を賜った。この場をお借りして深く感謝申し上げます。来年度以降も素敵な交流が続くことを心より祈り、結びとする。

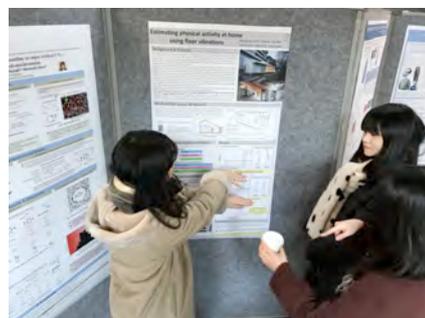
## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 佐々木 美緒

所属(Affiliation): 生活工学共同専攻 (指導教員(supervisor): 太田 祐治)

発表(Presentation): Estimating physical activity at home using floor vibration

今回 12 月 12 日～14 日に開催された第 8 回日韓三女子大学交流合同シンポジウムに参加してきました。本シンポジウムは日本からはお茶の水女子大学、日本女子大学、そして韓国の梨花女子大学の計 3 大学の間で行われる研究発表会であり、自分自身の研究について口頭発表とポスター発表を行いました。これまで学会などで何度か自分の研究内容を発表する機会はありましたが、英語で発表したことはなく今回初めて英語での発表に挑戦するため本シンポジウムへの参加を決めました。



私は元々英語を話すことに対する苦手意識が強く、口頭発表への不安が非常に大きかったです。しかし本シンポジウムへ参加するにあたっての事前準備として 2 か月間英語プレゼンテーションの講義を受けたため、最終的には自信がもてるほどしっかりと発表の準備ができました。この講義ではアカデミックな英語による発表のスライドの構成や見せ方、日本人が気を付けるべき英語の発音など今回のシンポジウムのためだけでなく今後にも役立つことを学ぶことができました。これまで英語で何かを発表する際に文法ばかり気にしており、発音に関しては注意を向けたことがあまりなく、今回発音にも気をつけながら準備を行ったことでよりネイティブに近い英語を話すことができたと感じています。講義内で発表練習を何度か行いましたが、それに加え指導教員の先生からアドバイスをいただいたり、研究室の友人たちと練習を繰り返し行いお互いにコメントしあったりすることでさらによい発表への準備をすることができたと思っています。今回のシンポジウムの準備を通して様々な人にスライドや発表をみてもらうことで、色々なフィードバックをもらうことができよりよい発表へとつながると実感しました。

シンポジウム初日、韓国に到着してすぐに梨花女子大学に向かいました。いままで韓国へ旅行したことがあり梨大駅にも来たこともあったため、懐かしさがありました。しかし、梨花女子大学構内に入るのは今回が初めてでした。これまで梨花女子大学は建築物として非常に有名なものであることは耳にしたことがあったため、建築物を見ることも楽しみにしていました。実際に目にしてみると、建物と自然を調和させるという特徴の通り、大学とは思えないほど周辺の環境と建築物が融合しており、思わず声が漏れるほど素晴らしいものでした。

2 日目に口頭発表を行いました。本シンポジウムは数学、物理、化学、ライフサイエンスの分野ごと 4 つのセッションに分かれており、参加しているのは主に理学分野の研究をしている学生が大半を占めていました。しかしわたしが専攻している分野は生活工学という工学系のものであり、同じ分野について研究している学生や先生は参加していなかったため、私たちの生活に関する工学という分野であるので比較的理解してもらいやすい内容であると思っただけでしたが、自分自身の研究内容を理解してもらえるのかという点で不安を感じる部分がありました。また事前にしっかりと準備を行っていても、やはり自分の発表前には緊張してしまい発表中つまってしまうこともありましたが、何とか無事に発表を終えることができました。参加したセッションとはまた異なる分野の研究内容であったにも関わらず、研究内容に興味をもついただき、発表を聞いてくださった梨花女子大学や日本女子大学の先生方から今後の研究の参考になる質問やコメントをいただくことができました。普段研究をただ行っているだけでは気づかないことに気づくことができ、このような場で自分の研究を外部に発信していく重要性を感じることができました。

私が参加したセッションにおいて、梨花女子大学側はポスドクや博士課程の学生が発表しており、発表を聞いていて非常に驚いたことが発表を行っていたどの学生も非常に話す英語が流暢であったことであり、質疑応答もしっかりと答えていたことが印象に残りました。セッション終了後に梨花女子大学の先生と話す機会があり、梨花女子大学の学生は皆流暢な英語を話しており驚いたということを伝えたと、博士課程以降の講義は全て英語で行っていると教えてくれました。本学でもリーディング大学院では主言語を英語として講義を行っているのは知っていましたが、日常的に英語に触れているとやはり英語の上達度が非常に上がるのだと身をもって感じました。これまで英語学習に対して避けていたところがありましたが、本シンポジウムを通して英語学習の意欲を向上させることができました。

そして最終日にポスター発表を行いました。前日の口頭発表では自分と同じセッションの学生の話のみを聞いていたため、ここでは興味のある他分野の研究内容について話を聞くことができました。いくつか興味深い研究があり、口頭発表とは異なり自分が疑問に思ったことや感じたことを直接聞くことができ、口頭発表だけでなくポスター発表もありよかったと強く感じました。また研究内容について知るだけでなく、他大学の学生とも交流を図ることができました。

今回本シンポジウムに参加させていただき、自身の研究に対する意欲が向上しただけでなく、英語学習への意欲も高めることができ、非常に良い機会を与えていただいたと感じています。今回のこの貴重な体験を通して学んだことを忘れずに、これからも精進していきたいと思っています。

最後に本シンポジウムに参加するにあたり、お茶の水女子大学の先生方をはじめ多くの方々のご尽力、ご協力を受け賜りました。この場を借りて深く感謝いたします。また、韓国で温かく迎えてくださった梨花女子大学の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

参加者名(Name): 浅野 春菜

所属(Affiliation): 生活工学共同専攻 人間工学研究室

(指導教員(supervisor): 太田 裕治)

発表(Presentation): Development of smart system to visualize knee load for KOA

今回のシンポジウムについては学内のポスターを見て知った。私は今まで、英語で自分の研究を発表した事が無かった為、国際学会の練習や自身の英語能力向上、また他分野の研究に対する理解を深めたいと考え、本シンポジウムに応募した。この度、本シンポジウムに参加する事ができ、非常に嬉しく思っている。



シンポジウムに参加するに当たって、事前準備として以下 2 つの点で苦勞した。まず 1 つめは、英語でのプレゼン資料作成だ。英語でのスライド作成は今回が初めてであった為、不慣れな英語のスライドを作成するのは、かなり時間がかかった。しかし、シンポジウム参加前に、プレゼンテーション法の授業を受講する事が義務付けられていたため、基礎的な英語プレゼンテーションを事前に学ぶ事ができ、とても参考になった。また、海外での研究発表であるため、一部地域でのみ使用されている「≡」ではなく、国際的に使用されている「≈」に変更するなど、文化的な考慮をしなければならぬ事も、勉強になった。

2 つめに、他分野を専攻する人にも分かりやすいスライドを作成する事と、他分野を英語で理解する事に苦勞した。私が専攻している生活工学分野の参加者は、今回の参加者の中で、同じ研究室である同期を含め 3 人のみであった。その為、私達の参加したセッションは「化学」であり、周りの化学専攻の学生とは全く異なる分野の発表であった。普段の研究生活で化学分野の方と話す機会はなく、工学分野の方と話す事が多いため、どう説明すると他分野の人にも伝わりやすいか、どんな絵を載せるとより理解しやすい発表になるかなど、同期と相談して何度も文章を推敲した。さらに、相手の話を英語で聞き取るだけでも私にはかなり苦勞したが、化学の専門用語となると、基礎知識が無いためより難しく感じた。そのため、事前に要旨を確認し、分からない専門的な化学用語を辞書で引くなどし、少しでも他分野を理解出来る様に努めた。

シンポジウムでは、事前準備の甲斐もあり、落ち着いて発表する事ができたが、梨花女子大学の学生や他の学生の流暢な英語でのプレゼンテーションと比較すると、自分の発表に至らない点が沢山あることに気付き、もっと努力すべきであったと反省した。私は、パワーポイントの原稿を見ながら発表していたが、梨花女子大学の学生は、何も見ずに流暢な英語で発表をしていた。さらに、身振り手振りや話している最中の間合いの取り方、発音など全てが素晴らしく、同じ年齢の大学生であるのに、ここまで差があるのかと愕然とした。セッションの休憩中に側に座っていた梨花女子大学の外人の先生に、「梨花女子大学の生徒の英語に驚いた」旨を伝えたところ、梨花女子大学では、院生になると全ての授業が英語で行われると聞き、日常生活から使用している英語の量の差にもショックを受けた。

また、研究発表の時以外の時にも、多くの事に驚き、学ぶ事ができた。初日のレクチャーゲームの際に、既に驚くことがひとつあった。それは、一緒にグループになった韓国人の子が、私の言葉に対して日本語で返答をしたことだ。聞くと、その子は日本語を勉強したことがあるそうで、簡単な日本語を全て話す事ができ、英語も流暢に話していた。私は大学の授業でフランス語を選択していたが、今は全く話す事ができないため、自分を恥ずかしく思うと共に、自分の国の言葉を他国の人が話してくれる事が、とても嬉しいことに気がついた。その日の夜、私は韓国に何度も旅行したことがある友達に簡単な韓国語を教えてもらい、もし機会があれば、韓国の学生に韓国語で話してみたいと練習をした。

2日目の夜に行われた親睦会で、せっかくなら韓国の学生と交流をしたいと考え、周りのほとんどが韓国人である席に友達と座った。私は、予め聞きたいと思っていた普段の生活についてや、お勧めの韓国コスメやお土産について質問をしたり、覚えた片言の韓国語を披露したりして、韓国の学生と交流を深めた。彼女達はとても優しく、私が聞き取れない文章を分かりやすい英語で言い換えて伝えてくれたり、お勧めの物を写真で提示してくれたり、私の韓国語を喜んでくれたりした。しかし、自分が話したいと思った事をすぐに英語に出来ない事が多く、伝えたい事は沢山あったが、実際に話す事が出来たのは、思っている事の半分程度で、悔しい思いをした。

また、話した韓国の学生達の研究室では、平日は朝9時から夜21時までには必ず研究室にいないといけない事や、土曜日でも研究室に行っている事などを知り、自分の生活と比較して驚いた。私も、研究室に毎日通っているものの、韓国人の子達はもっと努力を重ねている事を知り、自分ももっと研究や語学の勉強に力を入れたいと励みになった。

最終日のフリータイムでは、一緒に研究室の同期に、日本語を話す事が出来る韓国人の友達がいたため、その子に観光案内をしてもらった。その子は、「日本の政治と経済の授業をさっき受けてきた」と言っており、自分の国の事であるにも関わらず、日本の政治について聞かれたらどうしようとヒヤヒヤしている自分に情けなさを感じた。また、その子の大学では大学の卒業要件のひとつに TOEIC850 点以上が課せられている事や、韓国人は英語が上手な人が多い事を知り、自分がいかに今まで狭い世界で生活してきたかを痛感した。

今回のシンポジウムを通して、自身の英語能力を向上したい、もっと広い世界的な視野を持って研究活動を行いたい、という思いが強くなった。また、今回学んだ事を活かし、国際学会の参加などに挑戦してみたいと感じた。研究発表の場だけでなく、リハーサルの間を用意して下さった事、学生間で交流する事が出来る時間を作って下さった事、最終日に自由時間を設けて下さった事、全ての時間が有意義であり、本シンポジウムに関わって下さった全ての方々に、心より感謝申し上げます。有難うございました。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 保坂 玲

所属(Affiliation): 生活工学共同専攻 (指導教員(supervisor): 太田 裕治)

発表(Presentation): Study on the air outlet of a wearable air conditioner

実は私は、国内外問わず学会発表の経験がありませんでした。院生になり、なんらかの形で研究を発表してみたいと考えていた時、今年度より日韓三女子大学交流合同シンポジウムの募集対象に生活工学が加わったことを知り、良い機会だ、と参加を決めました。初めての研究発表が英語で、さらに外国であることはとても緊張し、不安なものでした。しかし開催場所が韓国トップの女子大・梨花女子大学であり、良い刺激を受けられるだろう、と自分を奮い立たせて準備に取り組みました。

本シンポジウムに参加するにあたり、発表練習のために水曜1限の Academic Presentation か木曜 1 限のプレゼンテーション法研究を履修する必要がありました。私は前者を履修しました。理由は簡単で、プレゼンテーション法研究が3学期のみ開講であるのに対して Academic Presentation は3・4学期開講であるため、シンポジウム後も英語での発表練習が出来ると考えたためです。英語の授業を履修することには2つのメリットがあったと感じています。

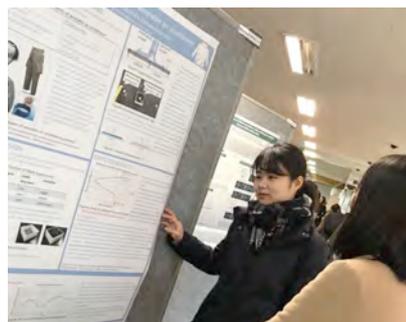
ひとつはもちろん英語に関することです。英語発表の際の言葉選びや言い回しなどを学ぶことが出来たので、落ち着いて準備を行うことができました。さらに授業時間外に先生にメールで質問をしたり、シンポジウム直前まで相談にのっていただくことが出来、改めて授業を取って良かったなあと感じています。

もう一つは発表内容、スライドの作り方についてです。本シンポジウムが一般の学会と最も異なる点は、「聴衆の専門がバラバラ」ということです。大学のゼミ発表での聴衆は同じ研究室のメンバーであったり、同じ専攻の人であることが多いため、その分野で当然とされる前提や専門用語を補足説明なしに用いることが出来ます。この授業には物理、化学、生物、情報…と様々な専門の学生が参加していたため、「この言葉の意味が分からない」「その条件下で実験するのは、あなたの分野では一般的なことなのか?」「こういう状況で使用可能なら使ってみたい」など、今までにない質問・コメントをもらうことができました。授業中にこうした意見を多数もらったため、専門外の聴衆にとってより分かりやすく、興味を引きやすいスライドを用意することができたと思います。

シンポジウム初日は先生方の基調講演と学生企画が行われました。基調講演は図やイラストが(おそらく)多めで、専門の異なる学生にも分かりやすいように、という配慮が感じられました。学生企画はジェスチャーゲームで、梨花女子大、日本女子大、お茶大の全員で楽しむことができました。

二日目は先生方の基調講演と、学生による口頭発表が行われました。発表は4教室・4セッションに分かれて行われ、私はそのうち一つの座長も担当しました。教室には日本人の先生と梨花女子大の先生がいらっしや、学生の発表に対して多くの質問を(もちろん英語で)されていました。私は無機化学のセッションの座長を担当しました。フロアからコメントが出ない場合に質問することが座長の責務の一つであるため、実験時間や前提条件など、少しでも疑問に思ったことをメモして 45 分を過ごしました。

最終日はポスター発表がありました。廊下に立てたボードにポスターを貼り付け、気になるポスターの説明を聞いたり、逆に自分のポスターを見ている人がいれば説明をしたり、とリラックスした雰囲気での2時間でした。私は学部で物理を学んでいたため、全体を軽く見た後は、素粒子理論の説明を友人から英語で受けました。一度学んだ内容でも、英語になると途端に難しく思ってしまうのは面白い事実です。



今回のシンポジウムを通して、自分自身の課題と、学生全体の課題を見つけることができました。私自身の課題は、定量的な議論を促すように発表内容を工夫することです。私の研究は始まったばかりということもあり、具体的な数値・結果を示すデータが他の学生に比べ圧倒的に少ないものでした。目に見えるデータを多く提示することができれば、より活発な議論が可能だったと反省しています。

学生全体の課題は、「英語で質問する練習をする」に尽きると思います。口頭発表では学生からの質問が非常に少なく、教室に 10 名以上の学生がいながら発言者数は片手で十分足りました。発表内容を 100%理解したり、鋭い質問をすることは難しいですが、自分の意思でシンポジウムに参加した以上、最低限コメントはするべきだと思いました。ポスター発表では、少なくとも私は日本人学生のポスターしか説明を聞こうとしませんでした。日本語でも理解が難しい他分野の説明を、英語で聞こうという気が起きなかったからです。日本人学生のポスターであれば日本語での補足が可能ですが、梨花女子大生にそれは頼めないため、初めから聞くことを諦めていました。来年度以降の参加学生には、英語での発表練習に加えて質問練習もしておくことを強く勧めます。

「自分の英語は(文法的に)間違っているんじゃないか?こんな初歩的な質問をしていいのか?」という不安は誰しも持っていますが、言いたいことが伝われば十分だと思いました。簡単な質問をされて困る発表者はいないし、自分が思っているほど周りは自分のことを見ていないからです。何より、質問・コメントをすることは、「あなたの発表を聞いていましたよ」という意思表示になるからです。

来年度以降、参加してみようかな?と悩んでいる人へ。発表の準備はたしかに大変ですが、英語で研究発表をする機会はとても貴重です。目的があれば研究に力が入りますし、英語力も伸びます。なにより韓国は食べ物はおいしいし、かわいいカフェやコスメショップがたくさんあり、どこを歩いても楽しいです!楽しむためにも手袋と帽子・耳当てを忘れずに。大学正門から会場までは 20m くらい高低差があるので歩きやすい靴で参加しましょう。ポスターの印刷は早めに済ませましょう。前日にやろうとして印刷機が故障したら…!

最後に、今回のシンポジウムに参加するにあたり支えてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。日頃より研究の相談に乗ってくださる太田先生、Academic Presentation できめ細かくご指導くださった松本先生・由良先生、要旨の添削・発表練習にお付き合いくださった Julien 先生、シンポジウム全体を取り仕切ってくださった相川先生、そして私たちを受け入れてくださった梨花女子大の皆様、本当にありがとうございました。

## 第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告 : Symposium Report

参加者名(Name): 齋木 美果

所属(Affiliation): 生活科学部食物栄養学科 (指導教員(supervisor): 赤松 利恵)

発表(Presentation): How Restaurants' Owners Plan Their Menus

2017年12月12日-14日の3日間、梨花女子大学にて日韓3女子大学交流合同シンポジウムに参加しました。もともと海外留学を志望しており、英語でのコミュニケーションの機会を得たいと思っていました。そして本シンポジウムを知り、そのファーストステップとして参加の応募することにしました。本学での選考を通り、本シンポジウムの参加が決まった際に、自分で目標を決めました。それは、1)自身の研究を他分野の学生にも分かりやすく伝え、興味を持ってもらうこと、2)他分野の学生との交流を図り、相手の専門分野を積極的に学び、自身の視野を広げること、そして3)国籍関係なく、多くの学生と積極的にコミュニケーションを取り、友好関係を築くことでした。

まず、初めの目標の達成に向けた活動は、後期の授業中の口頭発表練習から始まりました。国内の学会にて口頭発表を1回したことがあったものの、本シンポジウムでは、学会のように自身と似た専門の方ばかりが集まるものではなかったため、学会発表よりも研究の背景を分かりやすい言葉で説明する必要があると思っていました。そのように思っていたが、スライドを作り始めたときは、自身でも研究をうまく整理しきれませんでした。そのため、研究の背景・意義を改めて考えることから始まりました。そのため研究を分かりやすく説明するためには、自身の研究を網羅的に把握している必要があると感じさせられました。また、研究デザインについても、他分野の方からすると馴染みのない方法を取っていましたが、授業で学生から質問が出るまでは気が付きませんでした。自身の常識は、他人の常識ではないと言いますが、それを改めて痛感させられました。研究背景や研究デザイン以外でも、単語の選び方も気を付けて専門用語はなるべく使わないようにし、使う際も分かりやすい説明を加えるようにしました。口頭発表練習を通して、改めて自身の研究を見つめなおし、客観的にみられるようになりました。本番では、他分野の友人から分かりやすく興味深かったと言ってもらえ、また他分野の先生方からは質問をいただくことができ、興味を持っていただけたことを実感し、嬉しい気持ちになりました。

二つ目の目標を達成するために、本シンポジウム中に取り組んだことが大きく二つありました。一つは口頭発表の際に積極的に質問をすること、もう一つがポスター発表で他分野の学生さんの発表を聞きに行くことでした。口頭発表では、すべての口頭発表に質問をすることはできませんでしたが、質問しようと心に決めていたことで発表一つ一つを集中して聞くことができ、そのためにより発表内容の理解が進んだように感じました。また、他の学生の口頭発表を聞くことで、学生一人一人が私とは違った研究をしていて、それぞれが工夫しながら自身の研究の質を高めようと努力していることを感じることができました。それはとても刺激的で、私も今後より努めようと思われました。ポスター発表では、口頭発表のときよりも様々な分野の発表を聞きに行き、疑問に思ったことを積極的に質問しました。そのおかげで、今までは絶対に自分はこの分野を面白いと思うことはないだろうと思っていたような分野の研究も、互いにコミュニケーションを取ることでその興味深さを知ることができました。

最後の目的の達成のために、まず学内の授業の時から、積極的に一緒に参加する学生に話しかけました。また、学内のリーダーとなることで、日本女子大学の学生や梨花女子大学の学生と連絡を取り、リーダー間での交流を図りました。そのおかげで、本学の友人も多くでき、他大学の学生とも友好関係を築くことができました。友人は、全員私とは違う分野で、日常会話も少し違った視点で生活しているように感じました。違った視点で話してくれる内容は、非常に刺激的であり、そのような



友人関係は今後大切になると感じ、今後も頻繁に連絡を取り合いたいと思っています。また、梨花女子大学の学生と話す際は韓国語も使うようにしました。英語でのコミュニケーションでも意思は通じますが、やはり母国語を使う方が親近感が湧き、韓国の学生ともすぐに親しくなることができました。この友好関係は今後も途切れないようにしたいと感じました。

本シンポジウムに参加して、目的は大部分達成できましたが、まだまだ自分の分野の知識が足りないことにも気が付かされました。今後は、基礎的な知識も増やしていきながら、アップデートされていく情報にも後れを取らないように日々論文を読み、学会や勉強会に参加して、勉学に努めようと思います。

また、本シンポジウムに参加して、感じたことがありました。それは、準備の大切さです。専門的な情報を分かりやすく伝えるためには、思っていた以上の準備時間が必要でした。人に伝える際には、話す内容やスライドの文章といった言語的コミュニケーション以外にもボディランゲージやスライドの図・表などの非言語的コミュニケーションも大切で、そういったスキルは何度も練習をしたり、誰かに発表練習を見もらうことで向上されていくように感じました。また、発表が上手に感じた学生は自信をもって発表していて、それはやはり練習を重ねているためだと思うため、今後の発表の際には、準備を怠らず、自信をもって発表できるようにしようと思います。

本シンポジウムを通して多くのものを得ることができました。今後もこのような機会を見逃さないように、常にアンテナを張って生活しようと思います。